

松江市文化財調査報告書 第130集

池 平 山 城 跡

松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う

発 掘 調 査 報 告 書

平成21(2009)年10月

松 江 市 教 育 委 員 会

財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第130集

池 平 山 城 跡

松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う

発 掘 調 査 報 告 書

平成21(2009)年10月

松 江 市 教 育 委 員 会

財団法人 松江市教育文化振興事業団



池平山城跡の西2郭から日本海を望む

例 言

1. 本書は、平成21年度に実施した松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う池平山城跡発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する発掘調査は、鳥根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会が委託を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3. 本書に掲載した遺跡の所在地は、次のとおりである。

松江市鹿島町佐陀本郷2905-1、2905-3、2903-11、2903-13、2907-3、2903-2

4. 調査期間は以下のとおりである。

平成21年5月15日から7月24日

5. 調査面積及び開発面積は以下のとおりである。

開発面積 7,348m²

調査面積 526m²

7. 調査組織は以下のとおりである。

【調査主体者】	松江市教育委員会	教育長	福島律子
事務局	〃	文化財課	課長 吉岡弘行
	〃	〃	調査係長 飯塚康行
	〃	〃	主幹 赤澤秀則
	〃	〃	主任 後藤哲男
【調査指導者】	鳥根県教育委員会	文化財課	企画員 池淵俊一
	鳥根県中近世城館研究会	研究会	山根正明

【調査実施者】	財団法人松江市教育文化振興事業団	理事長	松浦正敬
事務局	〃	埋蔵文化財課	課長 廣江眞二
	〃	〃	課長補佐 錦織慶樹
	〃	〃	主任 門脇誠也
調査担当者	〃	〃	嘱託職員 廣濱貴子
調査補助員	〃	〃	嘱託職員 三代正裕
整理作業員	〃	〃	飯野正子

8. 本書の編集にあたり次の方に原稿を賜った。

第4章 池平山発掘調査に伴う¹⁴C年代測定を渡辺正巳氏（文化財調査コンサルタント）に執筆頂いた。

9. 本書の執筆、編集は、調査主体者である松江市教育委員会文化財課（赤澤・山根）の協力を得て、廣濱がおこなった。

10. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第三系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。

11. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

SK……土坑 P……ピット

12. 実測図、写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。



第1図 島根県・松江市位置図

目 次

巻頭カラー

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 調査の概要	
第1節 調査の経過と方法	5
第2節 A区の調査	8
(1) 土層堆積状況	8
(2) 遺構	8
第3節 B区の調査	14
(1) 土層堆積状況	14
(2) 遺構	15
第4章 池平山城跡発掘調査に伴う ¹⁴ C年代測定 (渡辺正巳)	18
第5章 池平山城の構造について	22
第6章 小結	32

図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	島根県・松江市位置図	
第2図	池平山城跡発掘調査位置図 (S=1:25,000)	1
第3図	池平山城跡と周辺の遺跡 (S=1:30,000)	4
第4図	開発予定範囲と調査区 (S=1:2,500)	5
第5図	池平山城縄張図	6
第6図	A区調査前地形測量図 (S=1:200)	7
第7図	A区調査成果図 (S=1:200)	9
第8図	A区土層断面図 (S=1:80)	11~12
第9図	A区SK01・02実測図 (S=1:40)	13
第10図	B区調査前地形測量図 (S=1:200)	14
第11図	B区調査成果図 (S=1:200)	15
第12図	B区土層断面図 (S=1:80)	16
第13図	柵列実測図 (S=1:80)	17
第14図	試料採取位置図 (S=1:200)	18
第15-1図	暦年較正結果：1	20
第15-2図	暦年較正結果：2	21
第15-3図	暦年較正結果：3	21
付図1	池平山城縄張図	23
付図2	和久羅城跡略測図	25
付図3	氏穴遺跡B区調査終了時測量図	26
付図4	湖北の主要城館	29

表目次

表1	AMS年代測定結果	19
----	-----------	----

図 版 目 次

巻頭カラー	池平山城跡の西2郭から日本海を望む	図版5	通路状遺構1完掘後(東から)
図版1	池平山城跡遠景(南東から)		通路状遺構1完掘後(南西から)
	A区調査前近景(北東から)		通路状遺構2完掘後(南西から)
	A区調査前近景(北東から)	図版6	SK-01・02完掘後(南東から)
図版2	A区北東側完掘後(北東から)		SK01完掘後(南東から)
	A区南西側完掘後(南西から)		SK02完掘後(南東から)
図版3	西2郭・西3-1、2郭完掘後(南西から)	図版7	B区調査前近景(北から)
	西3-1、2、3郭完掘後(南東から)		B区南側拡張区 調査前近景(西から)
	西3-1郭完掘後(南東から)		B区南側拡張区 調査前近景(東から)
図版4	西3-1郭南西端土層断面(南東から)	図版8	B区北側完掘後(南東から)
	西3-2郭完掘後(南東から)		B区南側~西側完掘後(西から)
	西3-3郭完掘後(南東から)	図版9	柵列完掘後P2~5(東から)
			柵列完掘後P5~7(北東から)
			柵列完掘後P8~10(北西から)

第1章 調査に至る経緯

池平山城跡は、文献資料では「朝山家系図」に朝山昌時が築城し、代々この城に拠ったとされる。また、『雲陽誌』には「古城池平山といふ、城主朝山安芸守と云人なり」という伝承を伝えているにすぎない。

鹿島町教育委員会（当時）が昭和57年9月～10月にかけて実施した中国電力株式会社島根原子力発電所2号機資材運搬道路新設にともなう氏穴遺跡の発掘調査によって郭と考えられる平坦面、柵列と考えられる土坑群が検出され、池平山城跡の掘め手に位置する北1郭と判明した。この際、池平山城跡本体の略測が行なわれ、主郭のほかに東1郭、南1、2郭、西1、2、3郭などの多くの郭配置をもつことを確認し、その際の略測図は調査報告書（『島根原子力発電所2号機資材運搬道路新設に伴う氏穴遺跡発掘調査概報』1983年3月）に掲載されている。

こののち、県道松江鹿島美保関線の道路改良事業が計画され、市町村合併後の平成18・19年度において同事務所からの受託事業として、大勝間山城の発掘調査を財団法人松江市教育文化振興事業団が調査主体となって行なった。

鹿島町役場以西（現：松江市役所鹿島支所以西）の県道松江鹿島美保関線の道路改良事業に伴う文化財調査については別途協議することとしていたが、池平山城跡に関しては、用地買収などが終了した平成20年11月、島根県松江県土整備事務所と松江市教育委員会で現地確認を行い、計画範囲内に西2、3郭の一部が該当するため、協議の結果、平成21年度に発掘調査を実施することとした。同整備事務所から平成21年3月6日付で文化財保護法第94条の発掘通知の提出を受け、同年4月1日付で発掘調査にかかる委託契約を締結し、財団法人松江市教育文化振興事業団が5月から斜面下方の民家等へ崩落などの危険を避けて設定した526㎡を対象に、今報告の発掘調査を実施するところとなった。



第2図 池平山城跡発掘調査位置図 (S=1 : 25,000)

第2章 位置と歴史的環境

池平山城跡（1）は、宍道湖の北方、松江市鹿島町佐陀本郷2905-1他に所在する。南西から北東にのびる丘陵尾根上に位置している。南側眼下に佐陀川が流れ、東側から南側には佐陀本郷の水田地帯が見下ろされ、1.2km西側には日本海が広がっている。

池平山城跡の主郭は、尾根の最高所に位置し、標高約65mを測る。周辺には主郭を含めて8箇所の郭と3箇所の堀切が確認され、他に主郭の縁辺部に土が盛られたところや土橋のようなところもみられる。今回は、主郭から西に派生する丘陵尾根上の西2・3郭の一面と南西側尾根の一部の調査をおこなった。1982年には北郭の一面が氏穴遺跡（2）の調査によって明らかにされ、柵の柱穴と考えられるピット群や土塁、土坑が検出された。

縄文時代 縄文時代の遺跡として有名なのは、1933年に国指定史跡となった佐太講武貝塚（17）がある。この遺跡は講武盆地の西側に位置している。貝塚は縄文時代前期の所産であるが、周辺の低湿地の調査では、縄文時代から古墳時代にわたる遺物包含層が確認されている。貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水性のものはわずかであった。貝類の他に骨角器や石製品も多く出土している。講武川北側に位置する堀部第1遺跡（31）の遺物包含層や北講武氏元遺跡（32）からは、縄文時代後期や晩期の土器が多く出土している。講武盆地は他にも多くの遺跡が存在し、その中央には面積180haに及ぶ水田地帯がひろがっている。

弥生時代 北講武氏元遺跡から出土した遠賀川系の土器は水田稲作の指標とされ、当地域において初期水田が開発されていたと考えられる。この遺跡では縄文時代晩期の突帯文土器と遠賀川系の土器と一緒に出土し、縄文時代から弥生時代の過渡的様相を知る重要な遺跡となっている。堀部第1遺跡で検出された57基の墳墓は、弥生時代前期の墓地である。これらの墓の上には標石があり、遠賀川系土器のみを供献している。墓域は“長者の墓”と呼ばれる円丘裾部に存在し、墳墓はそこを中心にして周りを巡るように列状に配置されていた。講武盆地の南側、南講武小廻遺跡（12）からは、墳丘の斜面に伴う石列が検出され、四隅突出型墳丘墓の可能性が示唆される。また、南講武草田遺跡（29）においては、弥生時代末から古墳時代にかけて営まれた墳墓が10基検出されている。大量の土器の中には、近畿系や吉備系、北陸系、朝鮮半島製の土器など搬入品が多く含まれ、他地域との交流が窺われた。この時代から海上交通が重要な役割をはたしていたと考えられる。

池平山城跡の西、佐陀川下流の南岸には、古浦砂丘遺跡（3）があり、弥生時代前期から中期にかけての墓地が検出された。60体以上の人骨が発見され、弥生土器や勾玉、管玉、貝輪、卜骨など多くの遺物が出土している。佐陀川を挟んで本調査区対岸には、稗田遺跡（5）があり、鍬、鋤、櫂、準構造船の一部など多くの木製品が出土し、周辺に大規模な集落の存在を窺わせる。同じく谷筋の斜面に位置する志谷奥遺跡（6）からは、銅剣6本、銅鐸2個が出土した。銅鐸の上部と銅剣の切先を下にして埋納され、それに伴う埋納坑も検出されている。他に大勝間山城跡（16）や鶴灘山遺跡（14）、戸崎遺跡（23）から弥生時代の住居跡が検出され、人々の生活の場所が徐々に明らかになってきている。

古墳時代 奥才古墳群（27）は、講武盆地の南側丘陵に築造された群集墳である。全部で68基の古墳を確認し、そのうちの40基が調査された。多くの古墳の埋葬には、礫床とよばれる小石を敷詰めた石

棺、木棺が採用されている。礫敷きの箱式木棺のなかには、長辺が4mを超え、主室と副室をもつ「奥才型木棺」と呼ばれる主体部があり、島根県では出雲平野西部から中海北岸かけて4箇所を確認されている。内行花文鏡、方格渦文鏡など青銅鏡4個、素環頭大刀、紡錘車形石製品、碧玉製石釧、琥珀製勾玉など豊富な副葬品が出土し、この地域の中では、高い階層者の墓であったと考えられる。前期から後期を通じて長い間築造された古墳である。奥才古墳群の西側に位置する丘陵には、未調査ではあるが、柄鏡型の前方後円墳を有し、10余基からなる鶴灘山古墳群(15)がある。名分丸山古墳群(11)は、全長40mの前方後方墳をもつ7基の古墳群、狐堀古墳(9)は礫敷きの箱式木棺もつ古墳で、これらは前期の古墳である。

後期では、板状の切石で造られた横穴式石室をもつ岩屋古墳(33)、横穴式石室を有していたという向山古墳(13)などがある。

後期には横穴墓も造られ、広い範囲に分布している。日本海側に近い恵曇の港を見下ろすところにある寺尾横穴墓群(7)は、古墳時代後期から奈良時代前半まで埋葬が続けられていた。鹿島町と生馬町との境にある高田尾峠で工事中に発見された高田尾横穴墓(28)には、2体の人骨が埋葬されていた。横穴墓から金銅製の圭頭大刀が出土したことは注目すべきであろう。

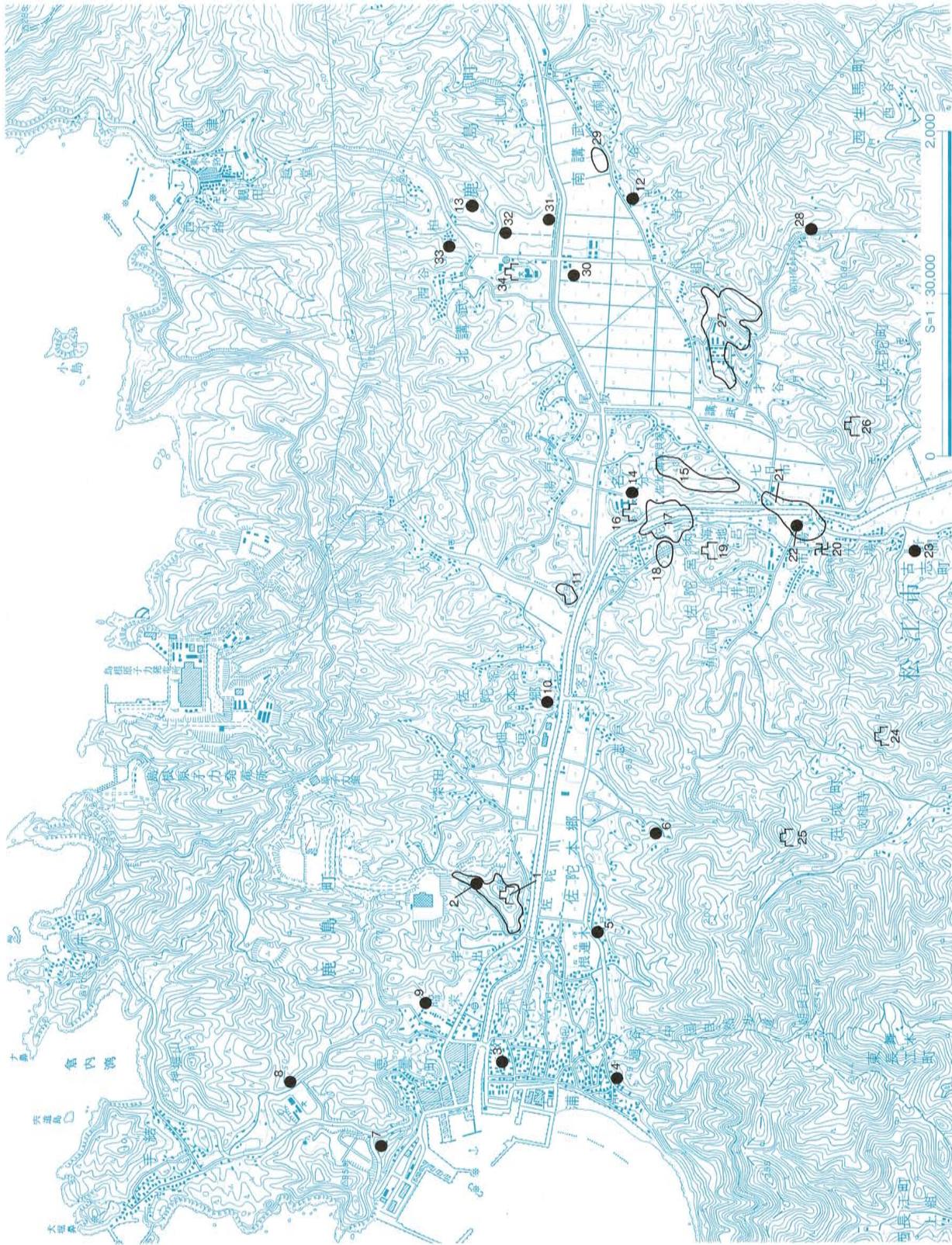
歴史時代 北講武氏元遺跡や戸崎遺跡から奈良、平安時代の遺物が出土しているが、数は少ない。講武川流域条里制遺跡(30)では、10世紀頃、講武盆地で条里制が敷かれたと考えられ、明治22年調整の字限地図及び現地の景況から察知される当地区条里制遺構の範囲図には、条里制地域に普通みられる三ノ坪、柳ヶ坪、八ヶ坪、丁ヶ坪などの坪名が残っている。

佐陀川の西岸にある佐太神社(20)は、出雲国一宮である杵築大社に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて勢力を誇っていた。佐太神社の神主は、鎌倉時代初期に佐陀荘の下司職に補任された朝山氏であった。その18代朝山安芸守昌時によって、池平山城は、応永6(1399)年に築城されたと伝えられる。

戦国時代にはいと、尼子と毛利の合戦は出雲国一円を戦場化した。大勝間山城や芦山城跡(19)、海老山城跡(26)、伊貝山城跡(25)、小田山城跡(34)など多くの山城が築かれた。大勝間山城は、『陰徳太平記』などの軍物記に名前が記された山城で、尼子勝久の近臣、三刀屋蔵人が戦いによって討死し、その墓は大勝間山城の丘腹にあることが知られている。

近世、江戸時代には松江藩士清原太兵衛によって佐陀川が掘削され、佐陀運河が完成した。(1784～1787年) それまで、大雨のたびに宍道湖が増水し、松江城下や宍道湖縁辺の田畑は被害を受けていたが、これによって水害は緩和され、水田開発が進み、海上交易も盛んになっていった。佐太講武貝塚や大勝間山城の発掘調査において、開削時の揚土が確認されている。

- 参考文献** 『新編 鹿島町誌』松江市 2007年
勝田勝年『鹿島町史料』鹿島町 1976年
『八束郡誌 本編』1973年
『佐太講武貝塚発掘調査報告書2』鹿島町教育委員会 1994年
『南講武小廻遺跡』『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』鹿島町教育委員会 1986年
『堀部第1遺跡』鹿島町教育委員会 2005年
『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年
『奥才古墳群第8支群』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会 2002年
『高田尾横穴墓』島根県松江教育委員会 2009年
『氏穴遺跡発掘調査概報』鹿島町教育委員会 1983年
『南講武草田遺跡』『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』鹿島町教育委員会 1992年
『大勝間山城跡発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江教育文化振興事業団 2009年



1. 池平山城跡
2. 氏穴遺跡
3. 古浦砂丘遺跡
4. 白畑古墳
5. 神田遺跡
6. 志谷奥遺跡
7. 寺尾横穴群
8. 山田古墳
9. 狐塚古墳
10. 本郷池頭遺跡
11. 名分丸山古墳群
12. 南講武小廻遺跡
13. 向山古墳
14. 鶴瀬山遺跡
15. 鶴瀬山古墳群
16. 大勝間山城跡
17. 佐太講武貝塚
18. 免目古墳群
19. 芦山 (呂山) 城跡
20. 佐太神社
21. 佐太前遺跡
22. 佐太川流域桑里制遺跡
23. 戸崎遺跡
24. 牛切山城跡
25. 伊良山城跡
26. 海老山城跡
27. 奥才古墳群
28. 高田尾横穴墓
29. 南講武草田遺跡
30. 講武川流域桑里制遺跡
31. 堀部第1遺跡
32. 北講武氏元遺跡
33. 岩屋古墳
34. 小田山城跡

第3図 池平山城跡と周辺の遺跡 (S=1:30,000)

第3章 調査の概要

第1節 調査の経過と方法

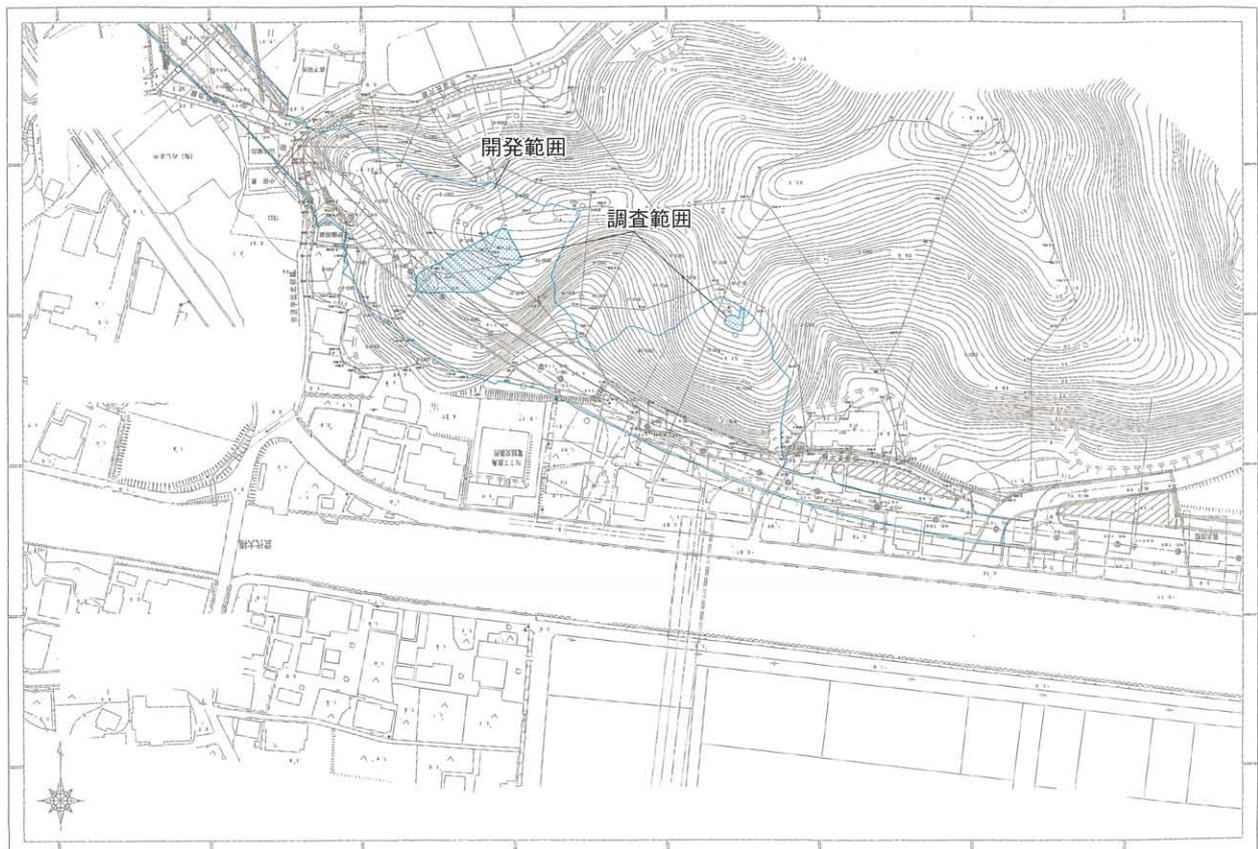
今回の調査は、松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う発掘調査である。

平成20年2月に行われた松江市教育委員会文化財課の現地踏査の結果から、工事範囲に含まれる西2・3郭の一画と、遺構の存在する可能性がある南西側尾根を調査することになった。西2・3郭の一画の調査区をA区、南西側尾根の調査区をB区として調査を開始した。

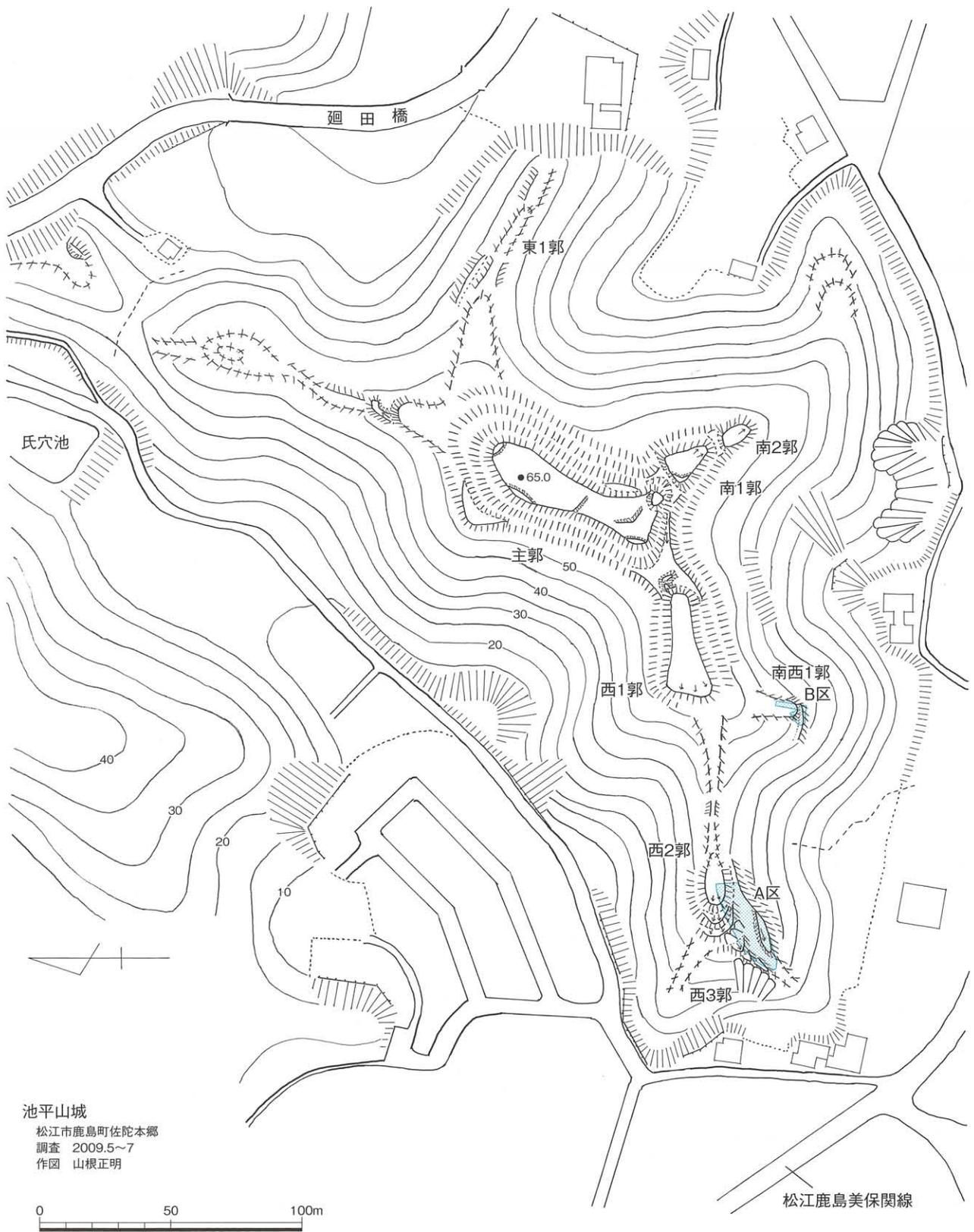
西2・3郭は池平山城跡の西側丘陵突端に位置している。A区は、西2郭の最高所から南北23m、東西24mの範囲で全面調査をおこなうこととなっていた。しかし、調査区の南東側から南西側にかけては急斜面であり、作業も困難で、危険も伴うと考えられたため、松江市教育委員会と協議し、この斜面については調査対象から除外することとなった。転落防止のため南東から南西側の急斜面上部に柵を作り、また梅雨の時期を含む調査であったため、調査区周辺に土嚢を積んで土砂の流失や雨水の排水対策をおこなった。調査区の北端と東端にトレンチを入れ、調査区中央に畦を設定し、土層を確認しながら調査を進めていった。

B区は、遺構の有無を確認するための調査であった。2×10mのトレンチを設定し調査をおこなったが、遺構は検出されなかった。しかし、トレンチの南側にやや平坦面が確認され、トレンチを延長して調査をおこなった結果、柱穴がみつき、調査範囲を南側から南西側に拡張して調査をおこなうこととなった。これにより、さらに柱穴が列状に検出され、柱列の規模や広がりを確認するための調査をおこなった。

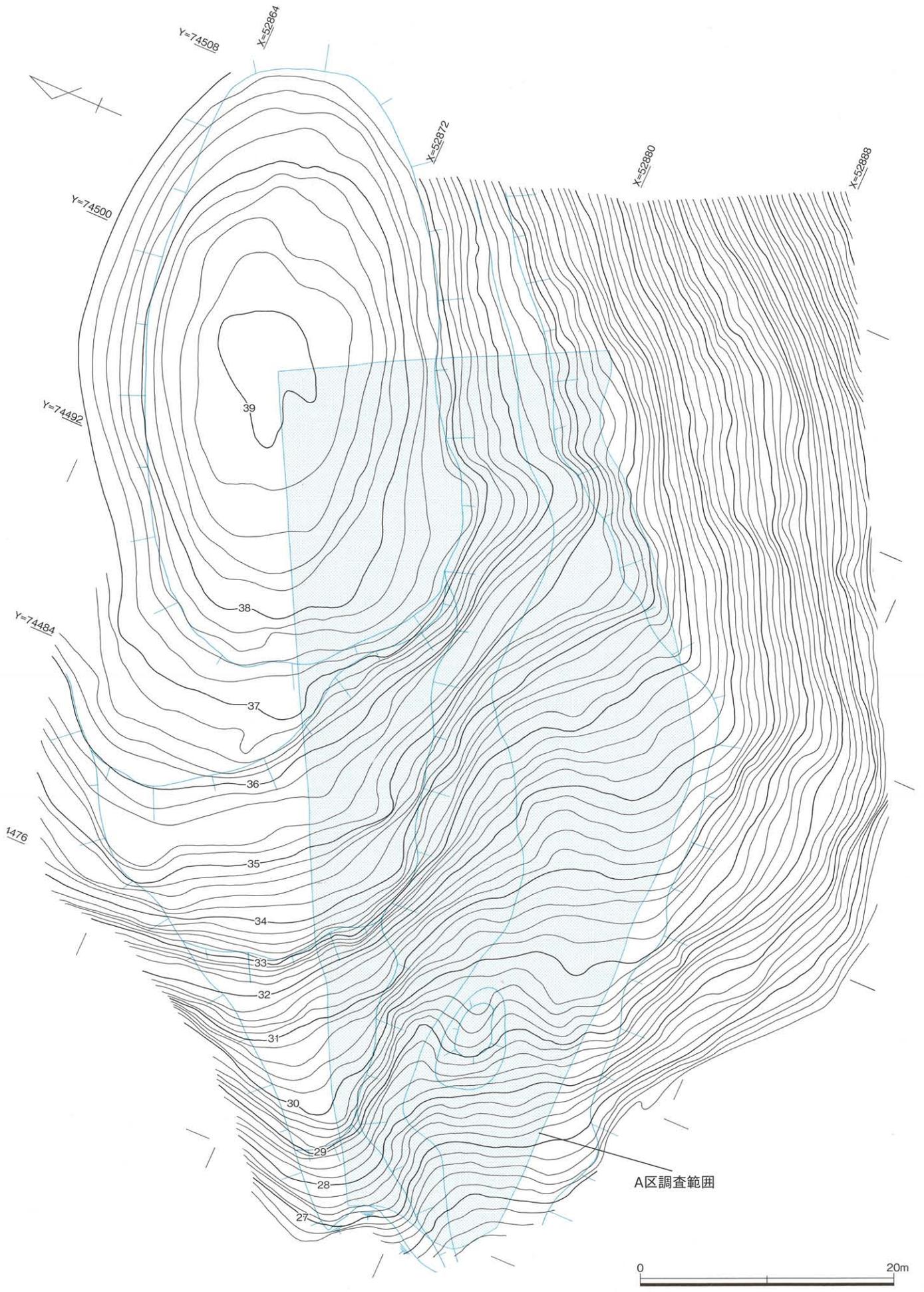
現地調査は、平成21年5月15日～7月24日までおこない、調査面積は526㎡である。



第4図 開発予定範囲と調査区 (S=1 : 2,500)



第5図 池平山城縄張図



第6図 A区調査前地形測量図 (S=1:200)

第2節 A区の調査

この調査区の地形は、北東から南西側にかけて丘陵の尾根が続き、その南側は斜面と平坦面になっている。また、尾根の北西側は急な斜面で、北東方向に向かって別の尾根が続いている。本調査区の最高所は、標高約39mを測り、調査前東西24m、南北11mの平坦面であった。この平坦面が、西2郭である。この平坦面の北東側には10m程の細尾根が続き、これは土橋とみられる。また、その北東側に、南西から北東側にのびる幅約15m、長さ約40mの西1郭が設けられている。

西2郭南側から土坑2箇所（SK-01・02）を検出した。当初、柱穴と思われたが、2箇所のみで他に確認できなかった。また坑の位置から柱穴とは考えにくく、土坑とした。

西2郭から南西側尾根に向かってやや傾斜はしているが平坦面が3箇所みられた。この平坦面は西3郭と考えられ、北東側から南西側に向かって、西3-1郭、西3-2郭、西3-3郭とした。

西2郭の南西側から西3郭の南側にかけて急斜面で、人為的に加工した切岸と考えられる。また、この斜面の南側は平坦面となっていて道と考えられ、通路状遺構1とした。また、通路状遺構1の南西側にはもう1箇所道のような所があり、通路状遺構2とした。

遺物は1点も出土していない。

(1) 土層堆積状況（第8図）

調査区全体は、斜面であるため堆積土は少なく、部分的に5～10cm程度の炭化物を少量含む土層が堆積していた（A区土層断面第2～6層）。堆積土が一番多くみられたのは、西3-1、2郭南側の斜面で、20～50cmの厚みで軟らかい風化土（A区土層断面B-B'第7～9層）が堆積していた。通路状遺構1、2は、堆積土がわずかにみられる程度で、表土（腐葉土）直下がすぐに遺構面であった。B-B'土層断面第31～33層は、通路状遺構の南側から斜面にかけて部分的にみられた土層である。地山ブロックを含む黄色系のしまった土層で盛土と考えられたが、平坦面から斜面に移行する肩部のような場所に盛土をする意味は何であったのか不明である。

各遺構の土層については、遺構ごとに後述する。

(2) 遺構

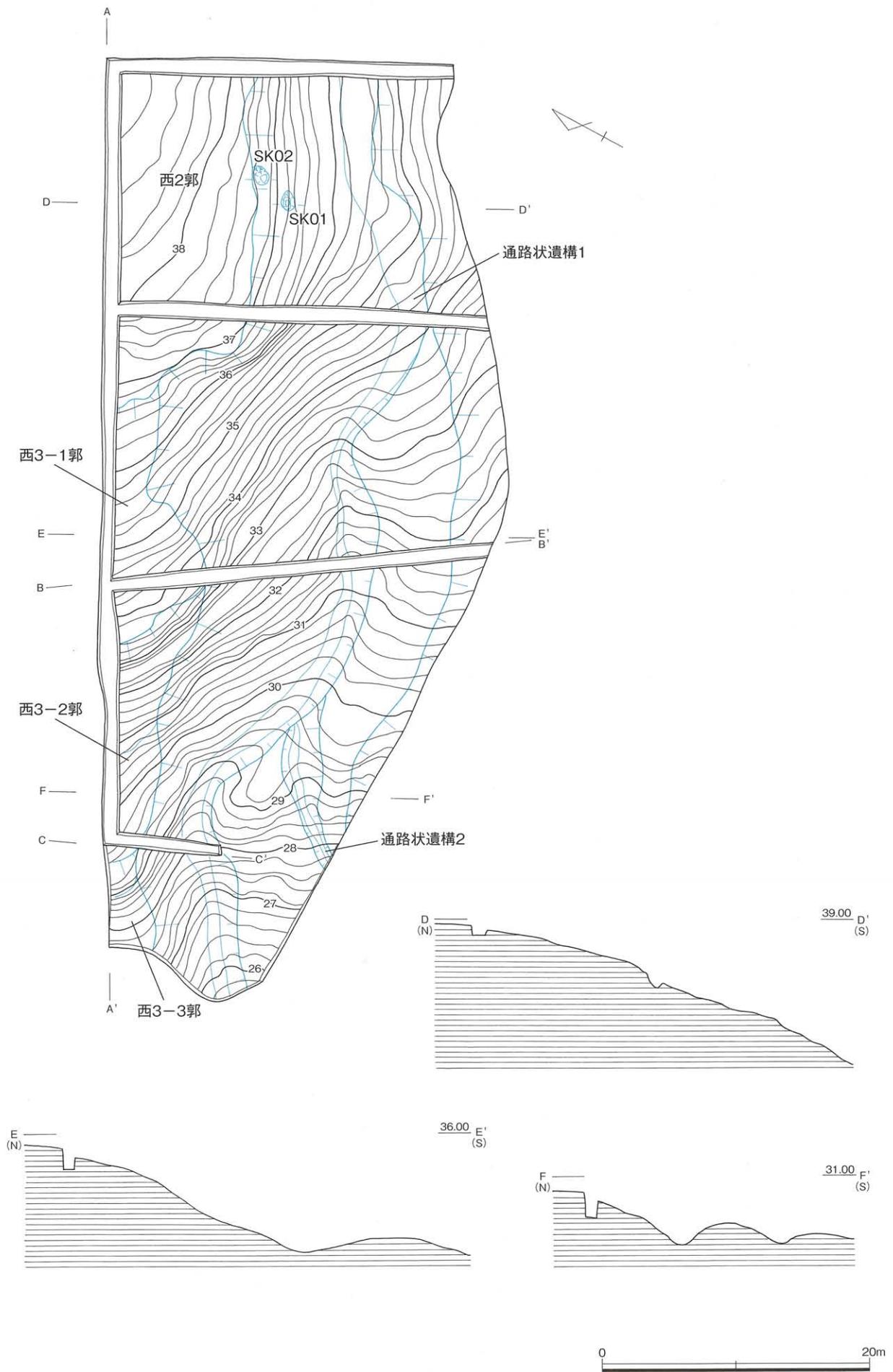
西2郭（第7図）

A区の最高所に位置し、西方に日本海を望む絶好の地である。工事の関係から西2郭全体の4分の1程度が調査対象地であるが、調査前地形測量から、東西20m、南北10m以上の広い平坦面であったと考えられる。平坦面は、地山を削って作られ、遺構面には所々に炭化物を多く含む暗黄褐色土（A-A'土層断面第12層）がみられた。サブトレをいれて土層確認をおこなった結果、遺構面の凸凹した部分に埋められた整地土であることがわかった。

西3-1郭（第7図）

西2郭から南西側に下った尾根に位置する。平坦面は、北東から南西側に向かって緩やかに傾斜し、標高は約33.3～36mを測る。調査は工事の関係から郭の南側半分だけであるが、調査前の地形も含めて考えると、東西約7m、南北約6～12mの平坦面と推測される。平坦面の南側は急斜面で、通路状遺構との高低差は1.5～2.0mを測る。郭の西端は、現在、土砂の流失や風化によって、オーバーハンクした様な状況であるが、西3-2郭との比高差約3mを測る急斜面で、切岸と考えられる。北西側も急斜面で、三方が急斜面となっている。

土層断面からこの郭は、地山面を加工し、その上に盛土をして造られた郭である。まず、地山面を



第7図 A区調査成果図 (S=1:200)

削って、やや平坦面になっていると考えられる。その痕跡はB-B'土層断面北側の地山面にみられる。A-A'土層断面第20層（黄橙色土）は、地山とよく似た土層で、郭の西端に僅かな平坦面を作るために盛られた土層である。その上に、盛土（第14～19層）をして高くし、平坦面を造ることによって郭としている。第19層の土層全体には炭化物が多く含まれ、盛土が施された年代がわかるのではないかと¹⁴Cの年代測定をおこなった。第4章、自然科学分析の試料No.3がその中の1点である。炭化物は紀元前9～10世紀（縄文時代後期）のもので、周辺環境が縄文時代から中世まで安定していたという結果であった。遺物が出土していないため、第19層が中世の盛土であったという明確なことはいえないが、縄文時代後期から中世まで安定していた地形が、中世に人為的に加工された可能性も考えられる。A-A'土層断面第17層（暗黄褐色土）は硬くしまった土層で、郭の端の崩落を防ぐために、土層を強固に固めていると考えられた。

盛土をして郭を造っていることを考えると、この郭もある程度、防御の拠点として重要な場所であったと推測される。

西3-2郭（第7図）

西3-1郭の南西側に位置する平坦面である。北東から南西側にかけて緩やかに傾斜し、標高29.9～30.4mを測る。調査前の地形も含めて考えると、東西約4.5m、南北2.7～5.0mを測る小さな平坦面である。西3-3郭との比高差は2.2mあり、斜面も急で切岸と思われる。

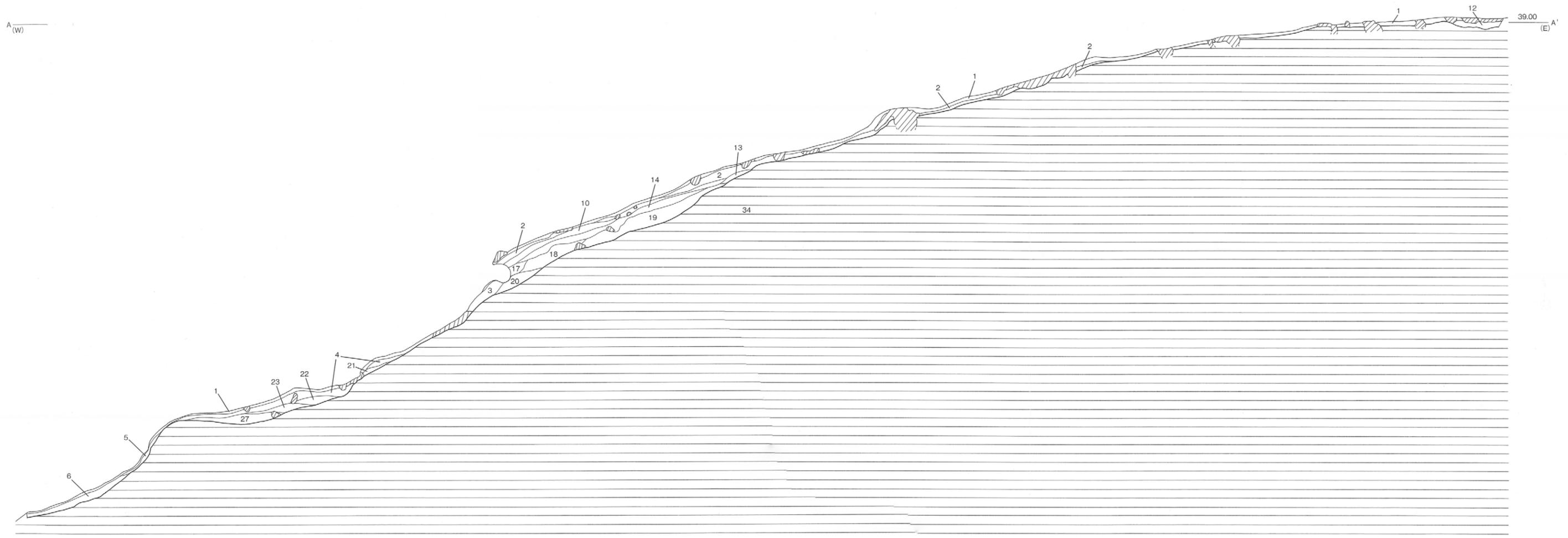
土層断面をみると、西3-1郭と同様、地山面を平坦に加工して、20cm程度の盛土（A-A'土層断面第22、23、27層）をし、平坦面を造っている。第26～29層（C-C'土層断面）は南側斜面に盛られた、盛土と考えられた。幅の狭い尾根を郭として利用するために、平坦面を少しでも広くしようとしていたと推測される。第25層（C-C'土層断面）は、斜面下端で確認した土層で、地山の黄白色土を硬く固めたような土層である。土層断面では不整形な円形を呈し、この土層の位置と形、土質から、盛土の流失を防ぐために置かれた土嚢的な役割をする土層と考えられた。

西3-3郭（第7図）

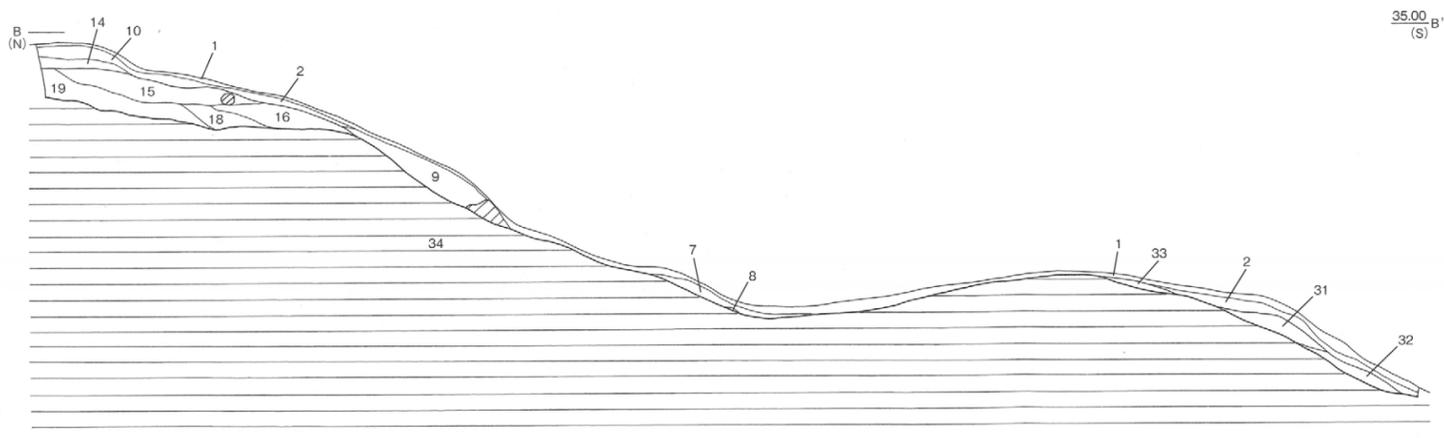
西3-2郭の南西側に位置し、地山面を削り出して平坦面を造っている。郭の西側は崩落しているが、現状で東西約4.5m、南北2m、標高27.7～28.1mを測る。崩落していなくても狭い平坦面であったと考えられ、防御のための郭の可能性は低いように思われた。

通路状遺構1（第7図）

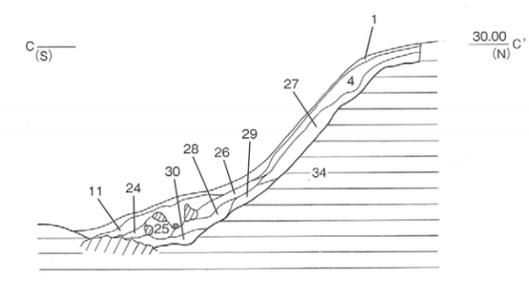
西2・3郭の南側斜面下に位置し、南西側から北東側にかけて検出した遺構である。地山の削り出しによって造られ、堆積土がほとんどみられなかったため、整地土などは確認できなかった。道は、西2郭の南側では幅1.0～1.5mのやや南側に傾斜しているがフラットな面をもち、西2郭の南西側から南西側斜面下に向かって急激に降りている。南西側斜面では、幅1.5～3.5mの緩いV字状を呈し、底面の幅は0.2～0.8mで人がやっと一人通れる程度のものであった。遺構面上に堆積土がほとんどなかったことを考えると、この場所が降雨時に雨水を一時に集める水路となり、このような形状になった可能性も考えられた。道は西2郭の南側から調査区外に続き、土橋とみられる北東側尾根へと繋がっている。南西側でも調査区外から崖の手前まで続いているように見える。検出した道の延長は38mを測り、調査区外も含めると50～60m以上になると推測される。路面の標高は、北東側の一番高い所で35.0m、最も降った南西側端で25.5mを測り、比高差は9.5mである。通路状遺構1は、上方に行くにしたがって道幅を狭くし、土橋へ繋がることによって、大人数での移動を抑制することによって、敵の行動を制御し、土橋へと誘い込んでいたと推測される。



A-A' 土層断面図



B-B' 土層断面図

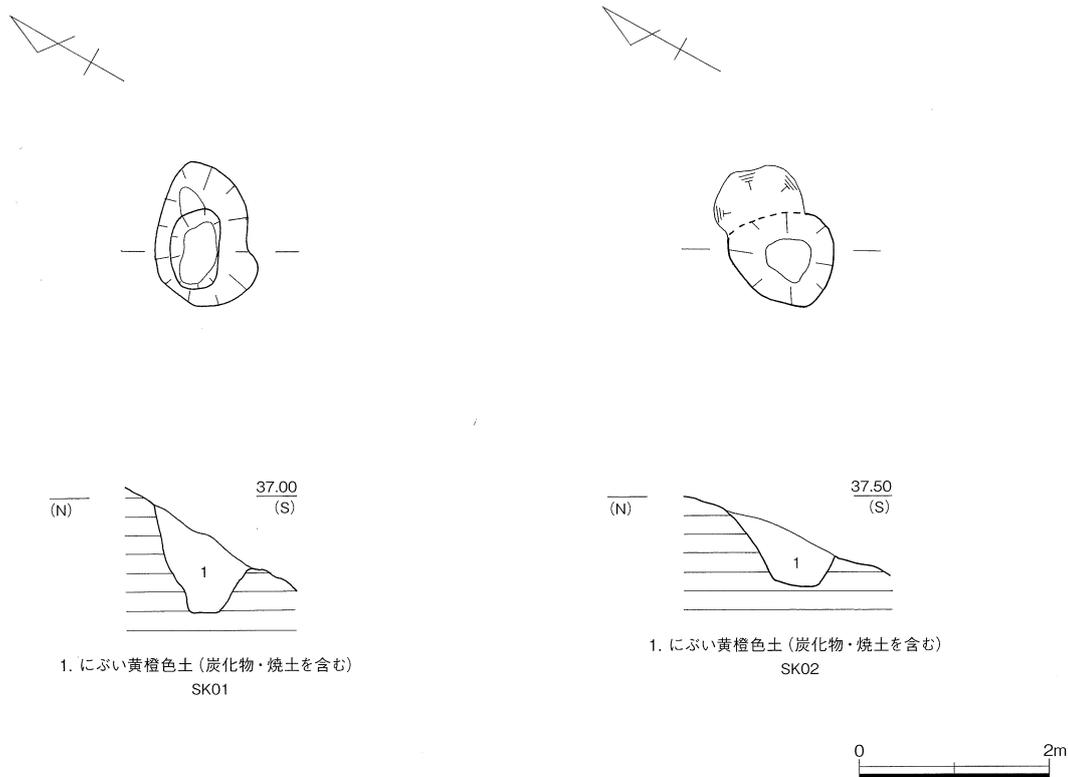


C-C' 土層断面図

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. 表土 (腐葉土) | 19. 明黄橙色土 (10cm 大の地山ブロックをやや含む) |
| 2. 暗黄褐色土 (灰色味をおびる) | 20. 黄橙色土 (硬くしまった土) |
| 3. 橙褐色土 | 21. にぶい黄色土 |
| 4. 明褐色土 | 22. にぶい明黄褐色土 |
| 5. 暗黄褐色土 | 23. 浅黄色土 |
| 6. 明黄褐色土 | 24. ややにぶい明黄褐色土 |
| 7. 暗灰黄色土 | 25. にぶい黄色土 (混ざりものない、硬くしまった土) |
| 8. 黄橙色土 | 26. 灰黄橙色土 |
| 9. 暗黄橙色土 | 27. にぶい黄色土 (地山ブロック、炭を含む) |
| 10. 明黄褐色土 | 28. にぶい黄橙色土 (大小様々な地山ブロック、炭を含む) |
| 11. 黄橙色土 | 29. 黄橙色土 |
| 12. 暗黄褐色土 | 30. 黄橙色土 (地山ブロックをやや含む) |
| 13. 黄褐色土 | 31. 淡黄橙色土 |
| 14. 黄橙色土 (炭を多く含む) | 32. にぶい黄色土 |
| 15. 明黄褐色土 | 33. にぶい黄褐色土 |
| 16. 明黄橙色土 (10cm 大の地山ブロックを多く含む) | 34. 地山 (黄白色土) |
| 17. 暗黄褐色土 (硬くしまった土) | |
| 18. 暗黄褐色土 (5~10cm 大の地山ブロックを含む) | |



第8図 A区土層断面図 (S=1:80)



第9図 A区 SK01・02 実測図 (S=1:40)

通路状遺構 2 (第7図)

南西側の通路状遺構の南側で検出した遺構である。北東側から南西側に向かって延び、北東側は通路状遺構 1 につながっている。検出した遺構は5.2mを測り、調査区外へと続いている。溝の断面形はU字状を呈し、底面幅は0.2~0.4mと狭い。底面標高は、北東側の一番高いところで29.4m、南西側の低いところで27.6mを測り、比高差1.8mである。堆積土がないため土層から通路状遺構 1 との新旧関係は確認できないが、検出状況から通路状遺構 2 が古いと考えられた。

SK01 (第9図)

西2郭の南側斜面で検出した、長辺0.75m、短辺0.55mの平面不整楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.57mを測る。埋土は炭化物や焼土を含むにぶい黄橙色土で、遺物は出土していない。この土坑から出土した炭化物も¹⁴Cの年代測定をおこなった。炭化物(試料No.1)は11~12世紀のもので、土坑が埋る時に混入したものと考えられた。周辺に火を焚いたところもみられず、土坑内も焼けておらず、用途不明の土坑である。

SK02 (第9図)

西2郭の南側斜面で検出した土坑である。SK01の北東側に位置し、長辺0.55m、短辺0.48m、検出面からの深さ0.4mを測る。遺物は出土しておらず、SK01同様用途不明の土坑である。この土坑から出土した炭化物(試料No.2)も¹⁴Cの年代測定をおこない、紀元前10~12世紀(縄文時代後期)という結果がでている。SK01と同様、混入物と思われる。

第3節 B区の調査

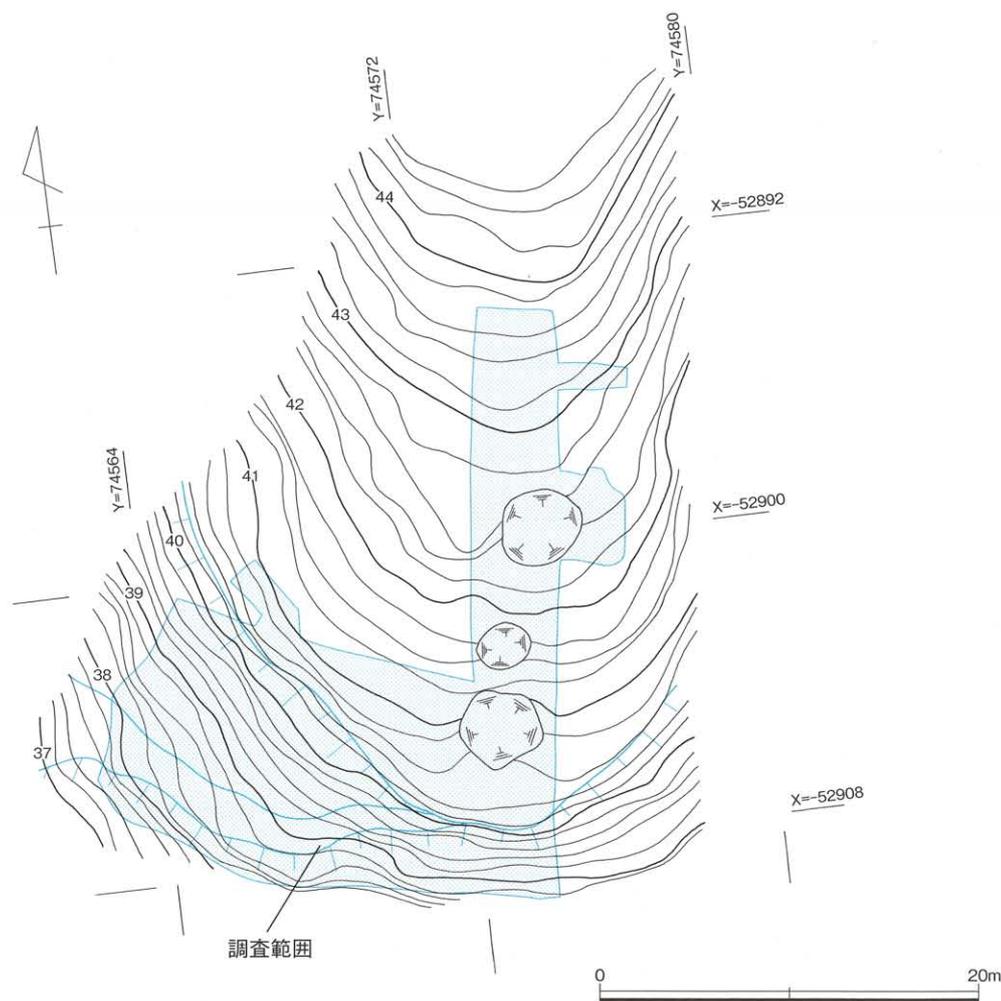
B区は、前述したように南西側尾根に遺構の有無を確認するために設定したトレンチ掘りの調査区であった。池平山城跡の主郭から南西側、南に派生する尾根上に位置している。北側には西1郭が存在し、東側、南側は急斜面である。西側は、木さえなければ西2郭を見通すことができる。調査区内には数箇所凹状に窪んだところがみられ、倒木痕もしくは植栽移植攪乱痕と思われた。調査の結果、10個の柱穴からなる柵列と通路状遺構1条を検出した。遺物は出土していない。

(1) 土層堆積状況 (第12図)

A-A'土層断面をみると、表土下に5~10cm程度の堆積土しかみられず、すぐに地山面であった。しかし、拡張した西側のB-B'土層断面を見ると、遺構面上に0.1~0.35mの厚さで土層(第2~8層)が堆積している。おそらく尾根西側の遺構面が緩斜面であったため、尾根の上方から流失した土砂が堆積したと考えられた。

地山は黄白色土層のところもあれば、角礫が多くみられるところもあった。第12、13層(黄褐色土・淡黄褐色土)は、倒木痕の壁面で検出した土層である。これらの土層には炭化物が多く含まれ、遺構の可能性も考えられたが、サブトレンチをいれて土層観察をおこなった結果、地山角礫の凸凹をなくすために埋められた整地土であることが確認された。

第15層(淡黄褐色土)は地山ブロックと炭化物を多く含む、硬くしまった土層である。尾根上に堆



第10図 B区調査前地形測量図 (S=1:200)

積土はほとんどみられず、この土層の位置や土質を考えると、尾根を削り出して平坦面に加工し、その土を尾根端に盛ることによって広くしたのではないかと推測された。土層断面から、この尾根には人為的に手加えられた可能性が高いと考えられる。

(2) 遺構

南西1郭 (第11図)

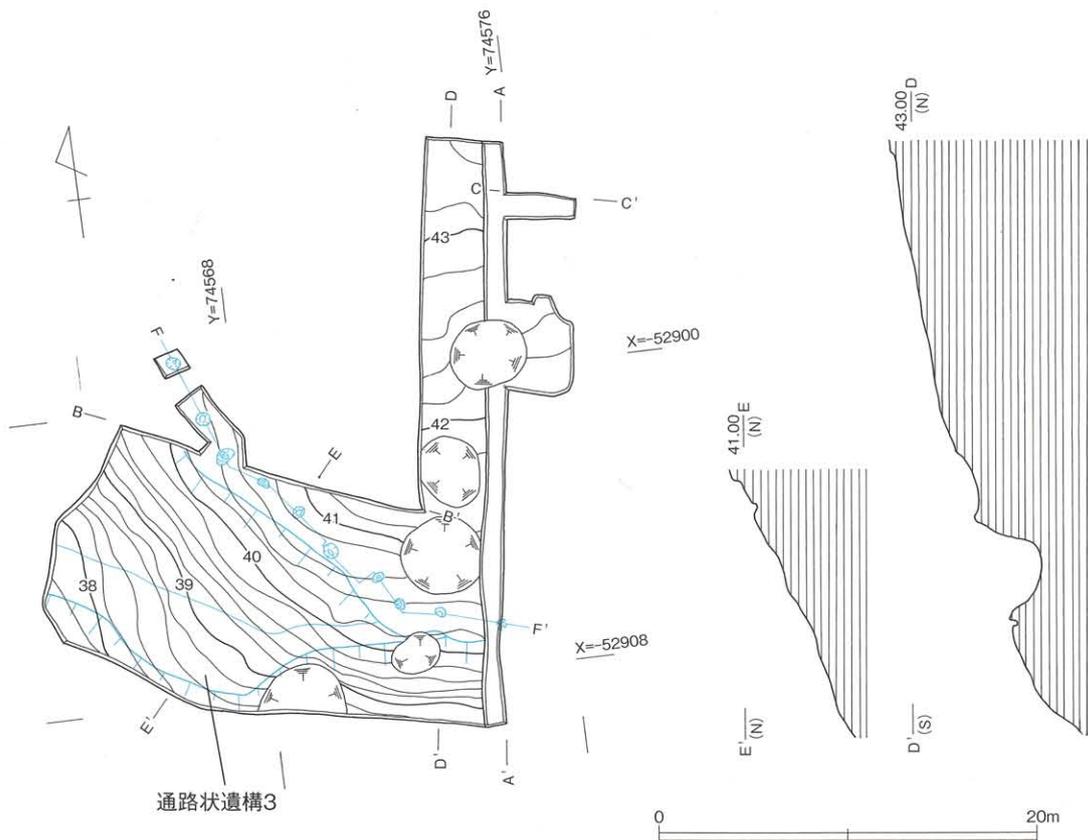
尾根は西1郭から南に向かって降っている。西1郭の一番高い所で標高56.5m、尾根の南端が40.3mを測り、比高差16.2mとやや急な斜面である。調査前の地形測量から判断すると、平坦面は幅約11m程度あったと推測される。

柵列 (第11図)

郭の南側から南西側で検出した遺構である。A-A'土層断面の柱穴も含めると10個の柱穴が、標高40.2~40.8m前後に緩斜面の端に沿って並んで検出された。柱穴間は1.3mものが多いが、P1とP2、P9とP10間は1.6mとやや広い。柱穴は長径25~60cm、深さ7~30cmと様々である。浅い柱穴が多く、後世の土砂の流失によって削平された可能性も高い。P7の柱穴だけがやや斜面下側(南側)に傾いていた。柵列を造り、郭の先端を守ることによって南西側の最初の防御拠点としていたと推察される。

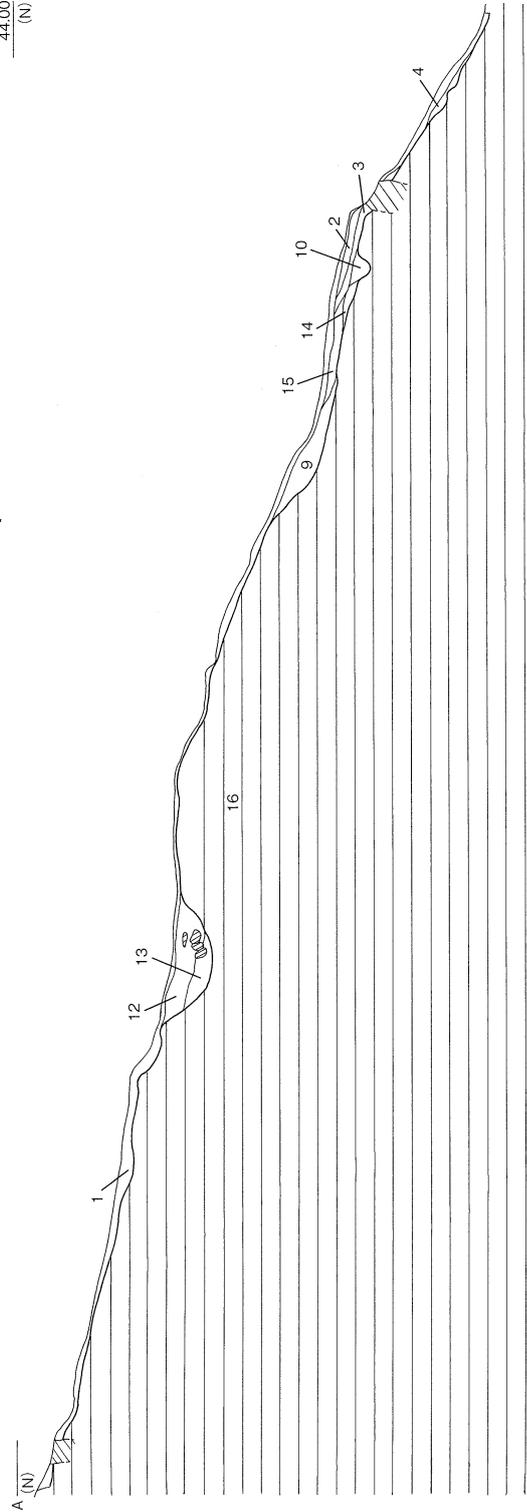
通路状遺構3 (第11図)

南西1郭の南側から南西側で検出した遺構で、山の斜面の地山を削り出して造っている。路面は、平坦面ではなくやや南に傾斜した緩斜面である。検出延長9.2m、幅0.5~2.0mを測り、東側で急激に狭くなっている。通路は西側調査区外から続いており、郭の南端で終わっている。標高は西側の低いところで37.8m、東側、郭の南端で40.2m、比高差2.4mを測る。この通路は、通路状遺構1、2より主郭に近く、西1郭へ上がる登り道と思われる。

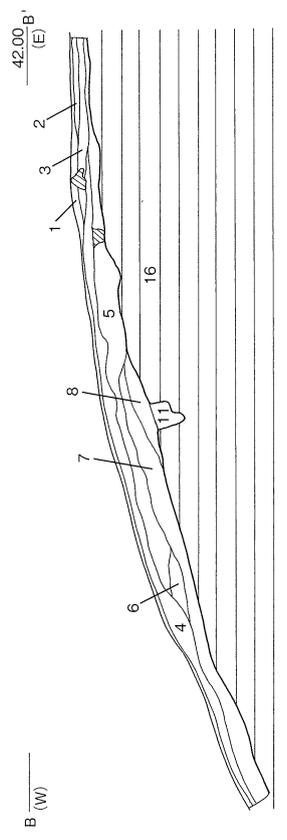


第11図 B区調査成果図 (S=1:200)

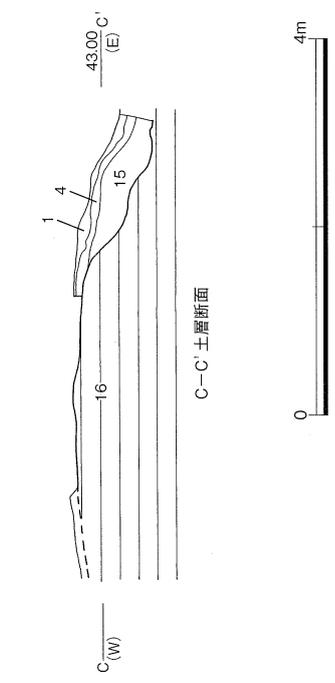
44.00 A'
(N)



A-A' 土層断面



B-B' 土層断面

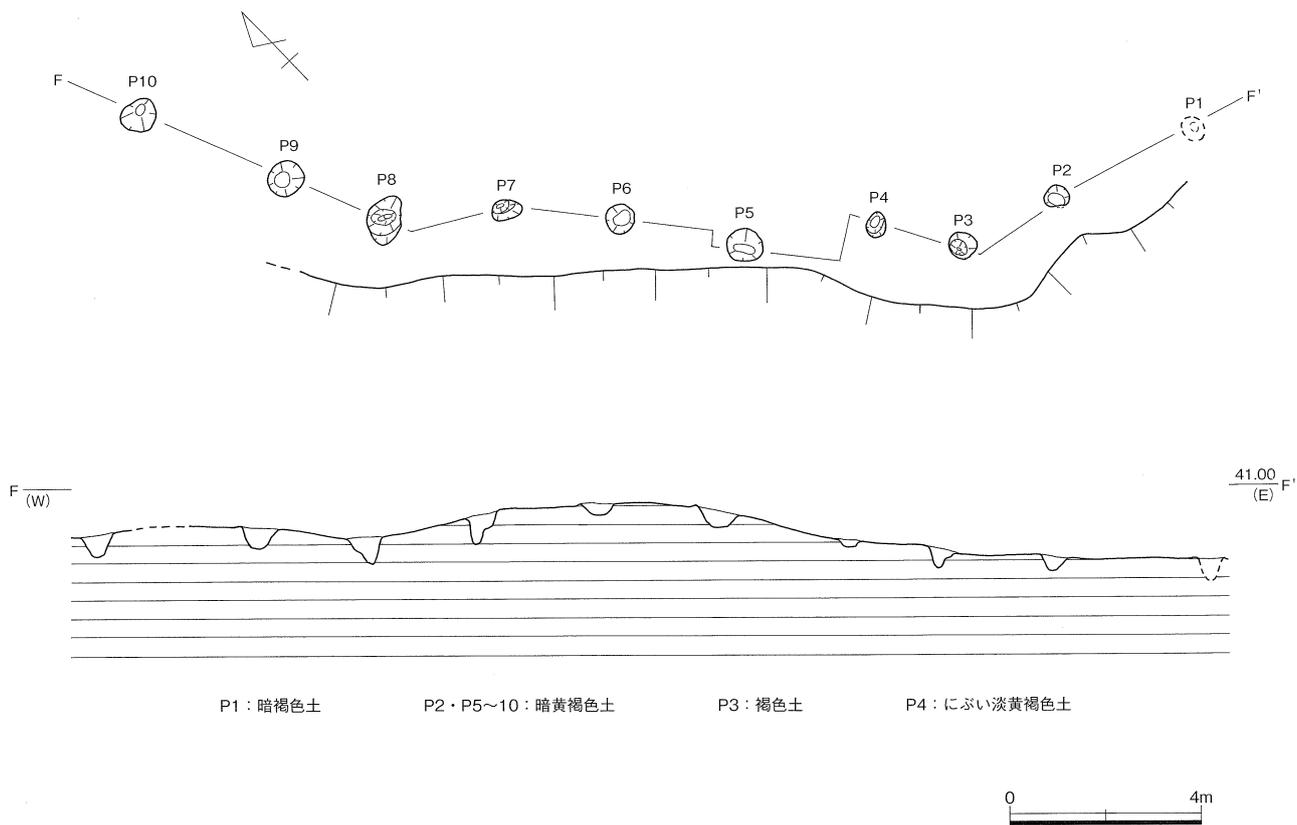


C-C' 土層断面

- 1. 表土 (腐葉土)
- 2. 黄色土
- 3. 旧表土
- 4. 暗黄褐色土
- 5. 暗黄褐色土~黄褐色土
- 6. 黄褐色土 (1~2cm 大の地山ブロックを多く含み、軟らかい)
- 7. 黄色土 (1~10cm 大の地山ブロックをやや含み、軟らかい)
- 8. 明黄褐色土 (5cm 大の地山ブロックを多く含み、軟らかい)

- 9. 明黄色土
- 10. 暗褐色土 (炭を含む)
- 11. 暗黄褐色土 (炭を多く含む)
- 12. 黄褐色土 (炭を多く含む)
- 13. 淡黄褐色土 (炭をやや含む)
- 14. 黄褐色土 (炭をわずかに含む)
- 15. 淡黄褐色土 (5~10cm 大の地山ブロック、炭を多く含む)
- 16. 地山 (黄白色土)

第 12 図 B 区土層断面図 (S=1 : 80)



第 13 図 柵列実測図 (S=1 : 80)

第4章 池平山城発掘調査に伴う¹⁴C年代測定

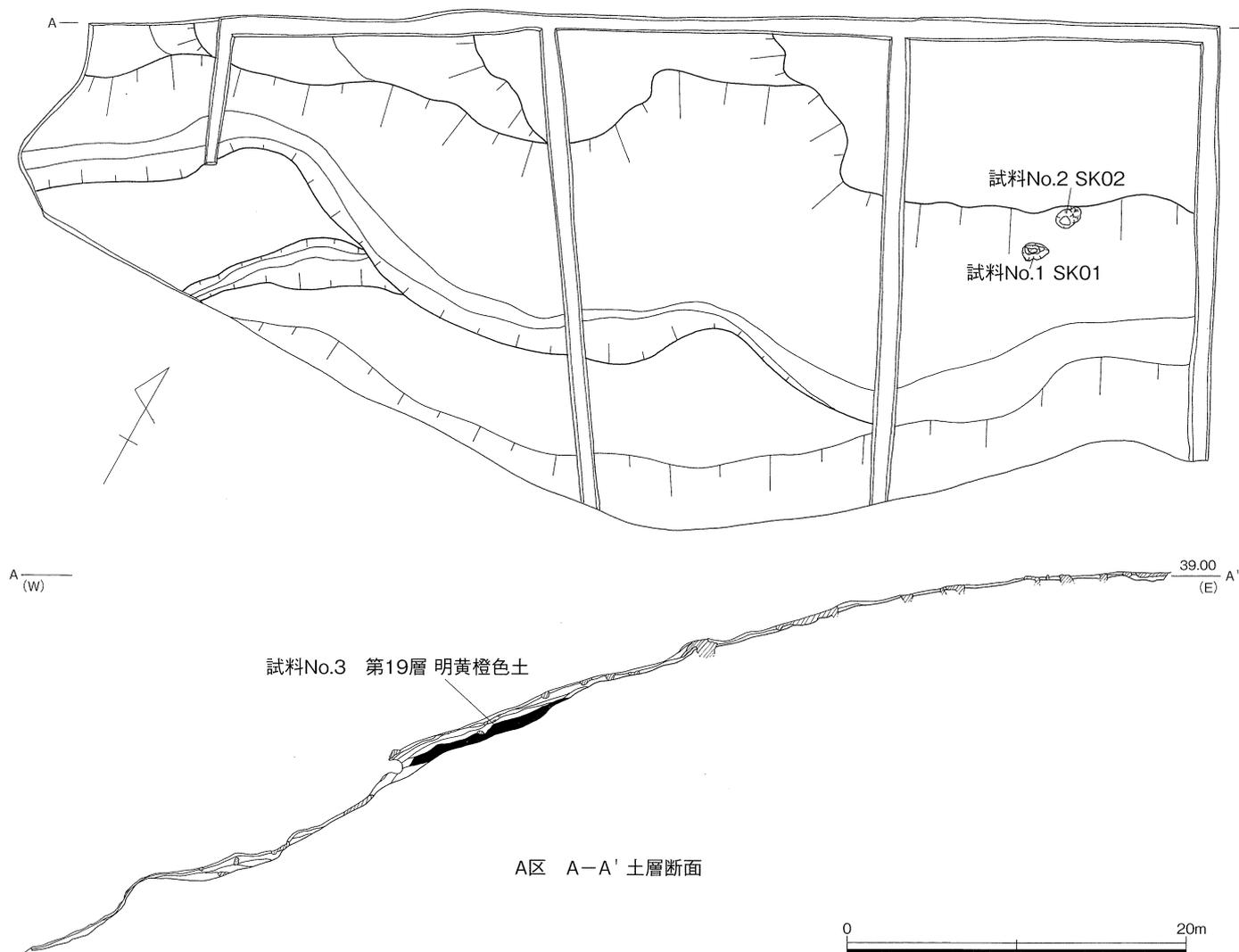
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1. はじめに

池平山城は、島根県東部松江市鹿島町佐陀本郷地内で14世紀末から16世紀中頃まで続いたと考えられている。本報告は、池平山城の実態を明らかにするために、財団法人 松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した¹⁴C年代測定業務報告書である。

2. 試料について

年代測定試料は表1に示す3試料で、財団法人 松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課により採取・保管されていた試料の提供を受けた。試料採取位置、あるいは層準を第14図の調査トレンチ平面図及び調査トレンチ断面図に示す。試料No.1、2はいずれもA区土坑内埋土（SK01、02）から採取された。また、試料No.3はA区、A-A'土層断面第19層、明黄橙色土（位置不明）から採取された。



第14図 試料採取位置図 (S=1:200)

3. 年代測定方法

(1) 前処理及び測定方法

1) 前処理

塩酸による酸洗浄（試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理）。

2) 試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を生成。

精製ラインにおいて水、二酸化硫黄などの不純物を除去。

精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。

アルミ製ターゲットホルダーにプレス圧入

3) 測定

タンデム型イオン加速器を用い¹⁴C濃度を測定する。

4) 年代計算

¹⁴Cの半減期を5568年として、年代計算を行う。

5) 補正計算

$\delta^{13}\text{C}$ を測定・算出し、4) で得られた年代値を補正する。

6) 暦年代較正

OxCal ver4.1 を使い、INTCAL04データを利用して算出する。

4. 年代測定結果

測定結果を表1に示す。また、暦年較正結果を図3～5に示す。

表1には、 $\delta^{13}\text{C}$ と補正¹⁴C年代、暦年較正用年代、暦年較正年代の3種類の年代値を示してある。（ $\delta^{13}\text{C}$ ）補正¹⁴C年代は、¹⁴C濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\text{‰}$ に規格化した¹⁴C濃度を求め、リビーの半減期（5568年）を用いて年代値を算出したもの（暦年較正用年代）の1桁を5年あるいは10年単位で丸めた値で、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年代は、INTCAL04を用いて、OxCal 4.1により算出・較正したものである。

表1 AMS年代測定結果

No.	試料		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C (yrBP)	暦年較正用年代 (yrBP)	暦年較正年代		測定番号 (PLD-)
	遺構名	状態				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
1	A区 SK01埋土中	炭化材 乾燥 0.1001g	-30.12±0.12	925±20	925±20	AD1045-1096 (43.0%) AD1120-1141 (19.3%) AD1148-1155 (5.9%)	AD1035-1160 (95.4%)	13979
2	A区 SK02埋土中	炭化材 乾燥 0.3773g	-26.73±0.12	2855±20	2855±22	BC1053-976 (68.2%)	BC1116-971 (85.5%) BC961-934 (9.9%)	13980
3	A区 トレンチ第19層	炭化材 乾燥 0.0496g	-25.79±0.19	2705±20	2703±21	BC894-874 (22.6%) BC848-816 (45.6%)	BC900-811 (95.4%)	13981

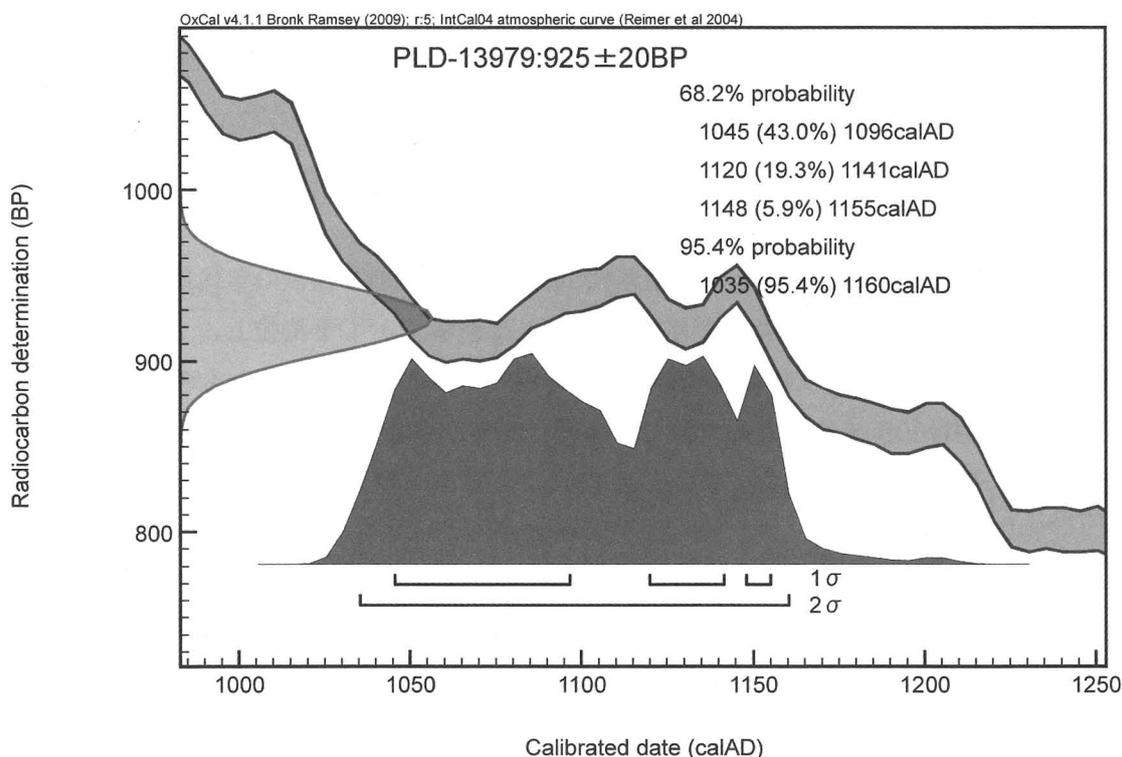
5. 年代値について

得られた年代値は、SK01埋土中の炭が平安時代後半、SK02埋土中の炭が縄文時代後期、第19層中の炭が縄文時代晩期という値であった。いずれも、今回の目的である池平山城（14世紀末から16世紀中頃）とは関係のない値であった。

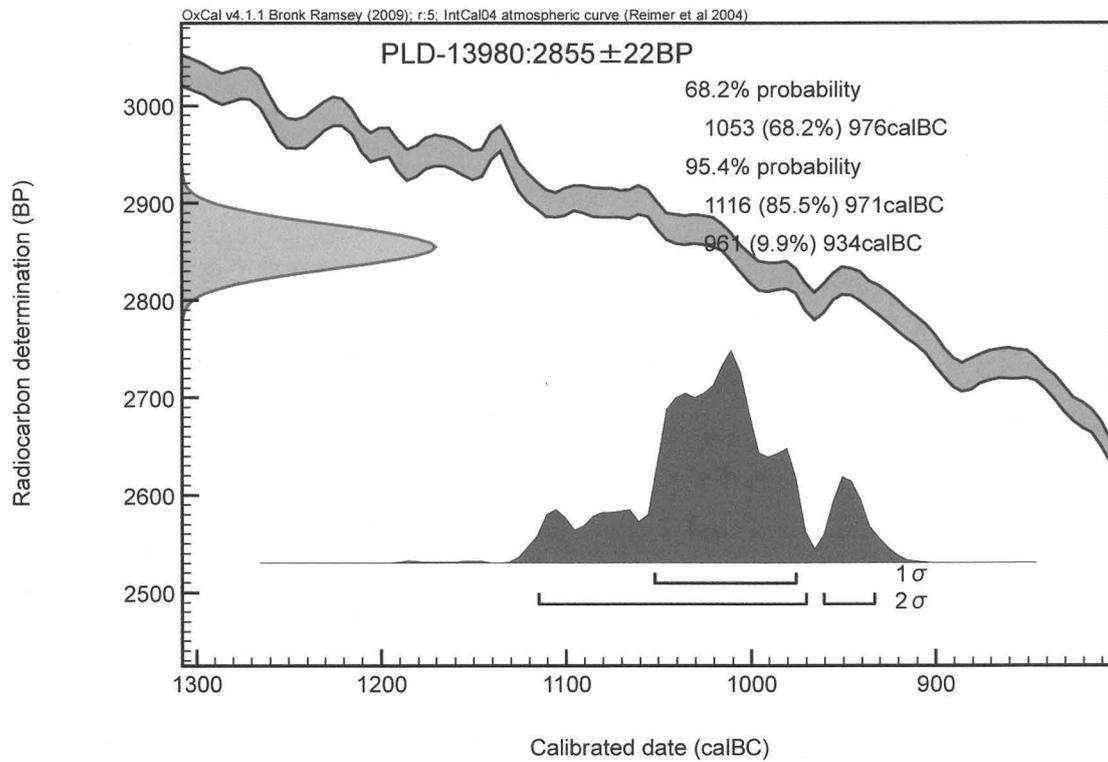
調査地点は丘陵上であり、長期にわたり安定した環境であった（浸食も堆積もほとんど起こらなかった）と考えられる。このため、縄文時代後期から平安時代、さらに中世の遺構が重なり合っているものと推定できる。今回の結果のみで、池平山城の存在を否定するものではない。

6. まとめ

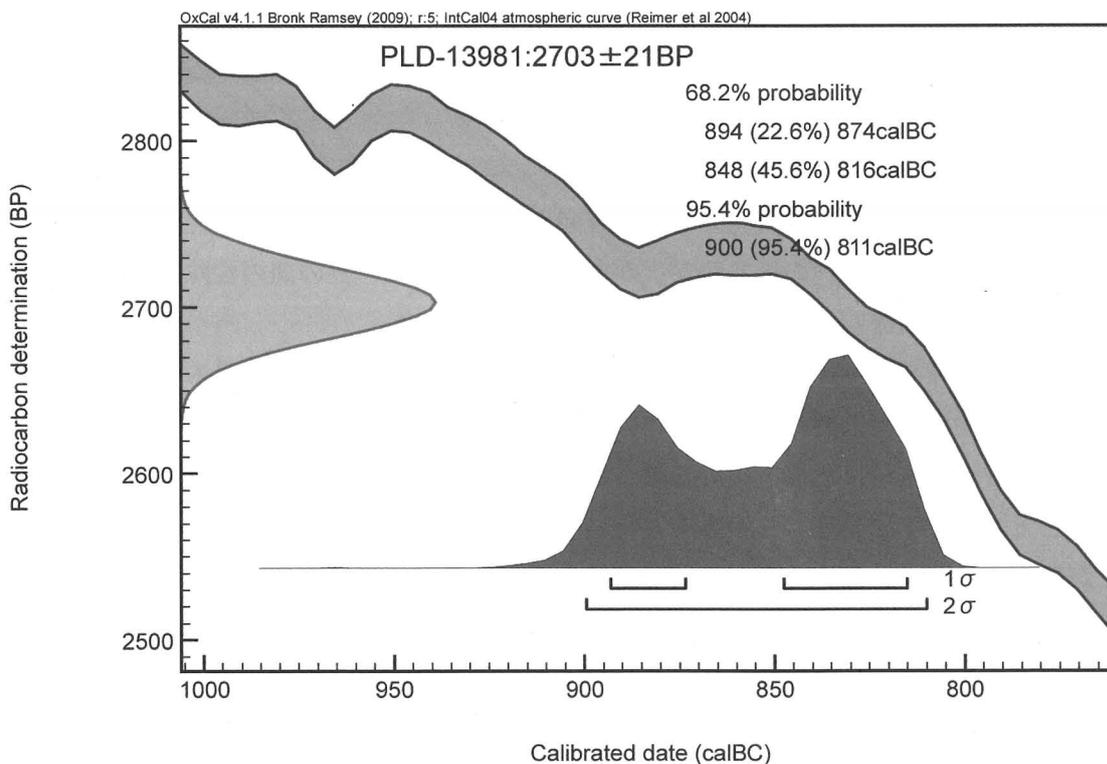
池平山城跡出土炭片を対象に、AMS年代測定を実施した。この結果、池平山城（14世紀末から16世紀中頃）に関係する年代は得られなかった。このことは、遺跡の立地する丘陵が長期にわたり安定し、縄文時代後期から中世に至る遺構が重なり合っていることを示唆する。したがって、今回の結果は、池平山城の存在を否定するものではない。



第15-1図 暦年較正結果：1



第15-2図 曆年較正結果：2



第15-3図 曆年較正結果：3

第5章 池平山城の構造について

松江市文化財課 山根 正明

はじめに

池平山城と鹿島町内の中世城館については、平成9年度までの5カ年間で実施された島根県中近世城館調査事業においても、曲輪と堀切等の現況を確認する程度にとどまっていた。(1) 一方では、島根原子力発電所2号機の資材運搬道路の新設事業や松江鹿島美保関線の改築(改良)工事などに伴って、山城遺構の一部が発掘調査され、それぞれの遺構の特徴が明らかにされてもいる。(2)

しかし、それらはあくまでも開発事業に伴う部分発掘であり、縄張全体の中に位置づけられたものとは言い難い。幸いなことに、池平山城については、発掘調査以前から縄張の概要を把握しそのうえで担当者と協議して調査範囲を確定することができたし、調査中に現地で細かく助言することもできた。城域全体からすれば一部分にとどまるとはいえ、縄張調査と発掘調査の双方の長所を組み合わせた調査ができたのが池平山城跡調査事業の特徴である。以下、発掘調査の範囲外に拡大して行った縄張調査の成果を述べることにする。

なお、佐陀川低地と講武平野周辺の山城遺構についての発掘成果などともあわせて考えてみたい。なぜなら、当城の位置する佐陀川低地は、日本海岸の鹿島町恵曇・古浦の港から宍道湖岸の内湖である佐陀江(満願寺江とも)を結ぶ起伏の少ない通路(江戸時代にこの低地を選んで佐陀川が開削された)であり、後者は雲芸攻防戦(1562~66)と尼子家復興戦(1569~71)の期間に激戦が展開された白鹿城や真山城の背後に位置するからである。

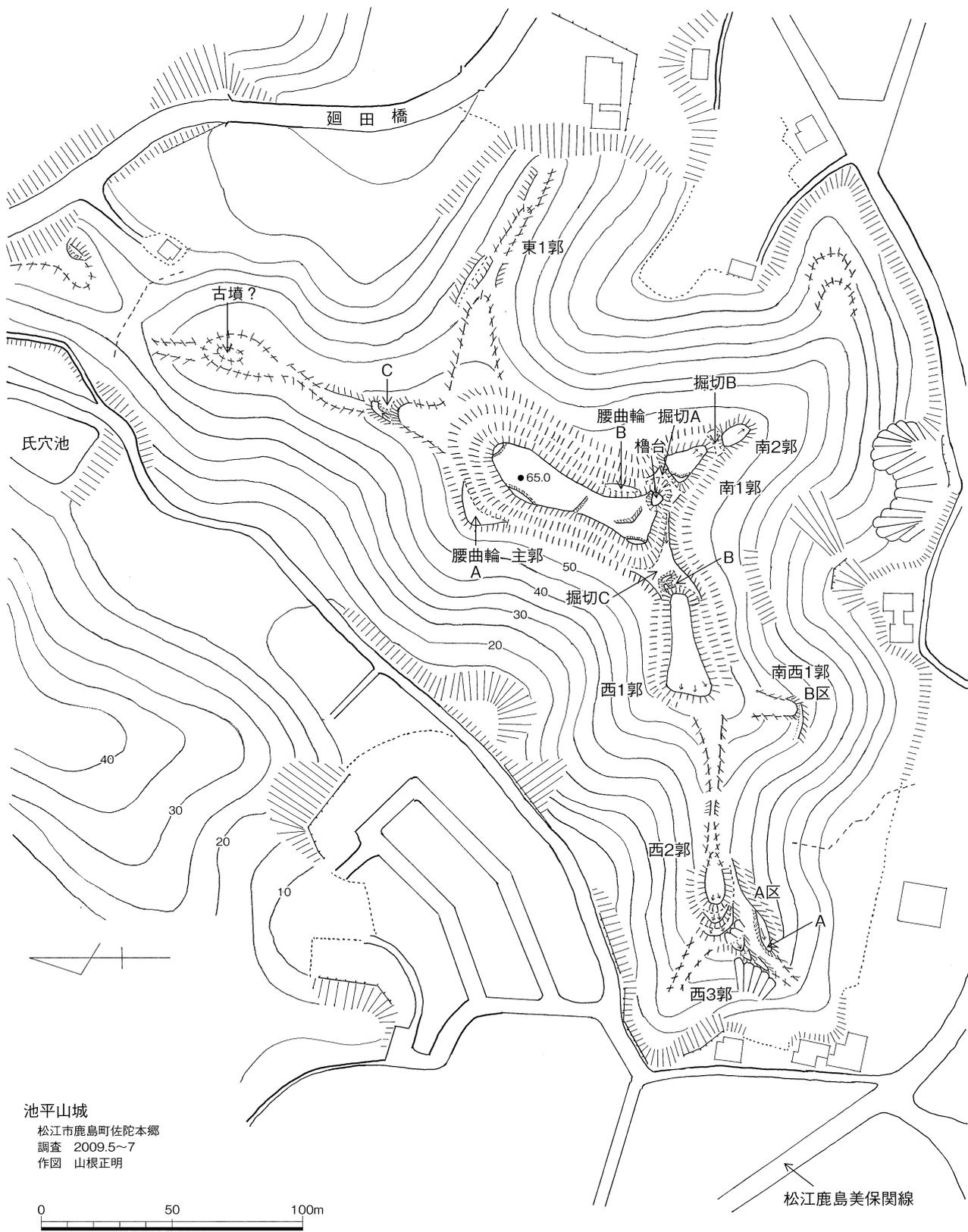
1. 池平山城の地取と縄張について

池平山は、佐陀本郷の水田地帯に向けて北東方向から突きだした舌状丘陵の先端に位置する。この南西には浜堤を基層とする武代の低丘陵が広がり、前述のように、その間の佐陀川低地には江戸時代に開削された佐陀川が西流している。

池平山の突起部(標高65m)を城域の中心として地取するのが池平山城である。これから北東方向に続く尾根筋は、深田運動公園への取付道路の道路敷地となって消滅した氏穴遺跡付近を鞍部としていったん落ち込むが、さらに北東方向の丘陵へと連続する。したがって、北方に対する眺望は限定されるが他の三方に対しては見晴らしが良く、特に恵曇・古浦の港を含めてその沖合の日本海を広く見通すことが可能である。なお、池平山の周囲は急な斜面や崩落地形に取りまかれており、山城として選定されるにふさわしい自然地形と言える。また、近代以降の造成ではあろうが、丘陵の裾の部分は宅地や道路敷地として削り込まれており、取り付くのを困難にしている。

池平山城は、突起部を尾根筋に沿って削平して不定型な主郭を設け、その南端から南東に向けて下る尾根筋と西方に向かって伸びる尾根筋に曲輪を配し、その間を堀切で切断するというのが縄張の基本である。(付図1 池平山城縄張図 参照)

なお、主郭の北端の西側に小曲輪(腰曲輪A)を取り付けているほか、北方の尾根筋には部分的に造成の痕跡が残り、氏穴遺跡方向に続く。また、東方の尾根筋にも同様な痕跡が認められるが、先端部分が宅地に造成されてとぎれており、道路で切断された氏穴遺跡方向とともに判断に苦しむところ



池平山城
 松江市鹿島町佐陀本郷
 調査 2009.5~7
 作図 山根正明

付図1 池平山城縄張図

である。

主郭の南端から南東に向かう尾根筋に設けられた二つの曲輪（南1郭と南2郭）は、それぞれが堀切Aと堀切Bで切断されるとともに、主郭の南東端に櫓台を配して南1郭との間の堀切Aに対する防御を強化している。なお、この尾根筋はさらに東方に曲がって下るが、その先端には曲輪とおぼしきゆるやかな加工段が認められる。

主郭の南西側の西1郭との間も堀切Cとされている。この堀切からは堀切Aに向かって上る通路の痕跡が認められるが、それはさらに伸ばされて主郭東側の小曲輪（腰曲輪B）へ続いていたと思われる。

西1郭も地形なりに造成された不定型な曲輪で、その西端からは、そのまま西方へ下っていく尾根筋と、南下方へ下る尾根筋とがあり、後者の先端部分がこのたび発掘調査が行われた調査B区である。B区の先端には西側の斜面から登る通路の痕跡が認められたが、発掘調査によっても柵列痕と思われるピットが発見されたので、登虎口と見てよい。つまり、B区を含む緩傾斜面（南西1郭）は西1郭への虎口空間と考えられる。

西1郭の西部は緩やかに下降する傾斜面が続き、西2郭さらに西3郭へと連なる。この緩斜面には、両側を削り落としたほぼ一人立ち程度の直線の通路が認められる。約10m程度の距離でしかないが土橋と見てよく、西2郭まで突破された後でも、この土橋に誘い込んで撃退することを念頭に置いた縄張なのであろう。しかし、この土橋をのぞくと、西2郭・西3郭と主郭・西1郭との間は、曲輪間の連絡が意識された縄張とは言い難い。

西3郭は階段状の狭い小曲輪群から構成され、これと対応する南側は登土塁状に縁取られ（A）、その間は窪地状になっている。つまり、西3郭の小曲輪群もその西側が崩落地形であることと相まって登土塁のように連なるから、両側を登土塁に挟まれた虎口空間が形成されていると見てよい。このような縄張は、後述する和久羅城の虎口空間と類似している。なお、西2郭とその腰に取り付いた小曲輪は、この虎口空間と北西方向の緩斜面を俯瞰して防衛する拠点の役割を担っていたのであろう。

2. 池平山城の普請について

池平山城の普請は、主郭付近をのぞくと全体に丁寧さが感じられない。主郭自体も地形なりに造成された不定型な曲輪で、長軸が約65m、短軸は約20mである。中央のやや南にゆるやかな鞍部があったものとみえて低まっており、そのため若干の段差がついているが、上面の削平は丁寧である。北方へ続く尾根筋を見下ろす北端と腰曲輪Aに面した西側、さらに堀切Cに面した南西端には土塁を設けているものの、普請は雑だったようでかなり流れている。南東端の櫓台も約50cm程度の高さで、現状では上面が丸みを帯びている。

反面、堀切は急角度に削り落とされている。堀切Aは主郭側を削り込んで造成されたもので、約7mの高度差を持つ。櫓台はこれを見下ろす位置にある。堀切Bの南1郭側の高度差は約5mである。また、堀切Cも主郭側を大きく削り込んで造成されたらしく、約10mの高度差があつて、主郭側へ直接よじ登るのを困難にしている。このため、前述のように、堀切Cから堀切Aへ上りさらに腰曲輪Bへと続く通路が設けられていたのではあるまいか。南1郭の北西端の土塁はこの通路に向けて設けられたものであろう。

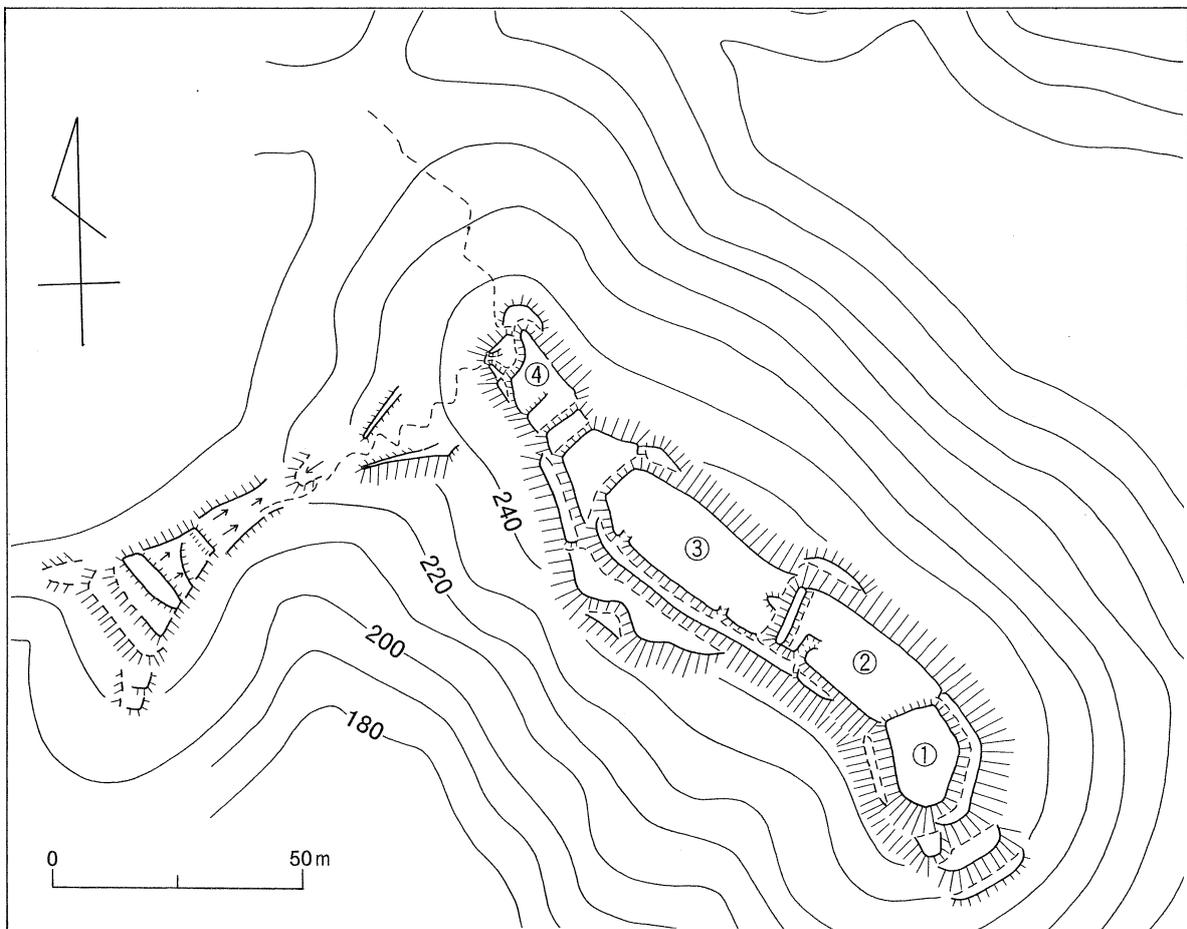
なお、堀切Cの西側には逆L字型に造成された土塁状の高まり（B）が認められるが、これが西1郭への虎口に当たるかどうか、地表面観察だけでは断定できない。同様にL字型に造成された土塁状の

高まりは、主郭から北方へ続く尾根筋の付け根（C）にも認められる。後者の場合、その普請は高度差を利用して前者よりも丁寧であるが、この背後の斜面にはかすかに均された様子は認められるものの曲輪に造成したとは言えず、理解に苦しむところである。

西1郭も地形なりに造成された不定型な曲輪で、長軸は約40mで短軸が約15mである。この東端には前述の土塁状の高まり（B）が取り付いているが、西端は切岸と呼べるほどの明瞭な法面は認めがたい。しかし、調査B区で判明したように、柵列を伴う登虎口がその南端下方に設けられていたことから、普請は不十分ながら曲輪（南西1郭）と見てよい。その機能としては、西1郭への虎口空間であったことは明らかである。

柵の柱穴は、発掘調査で10個が確認されており、標高40.2m～40.8m前後にほぼ等間隔に掘られている。その心々距離は平均約1.3m、深さは約7cm～約30cmでばらつきがあるが、一貫した縄張観のもとでの同時期の普請と見ることができよう。ただ、後述するように氏穴遺跡のB区と荒隈城の一之郭で検出された柱穴とは性格を異にすると考えられる。なお、この柵列の外側に通路となる坂道が設けられており、柵列を回り込んで虎口に至ることになる。

この登虎口への通路は、西1郭から西2郭に続く斜面の南側を、東側に向かって登っていたと思われる。また、西3郭の西端の登土塁に挟まれた虎口空間へも、おそらくこの南側斜面を西側に向かっ



『出雲・隠岐の城館跡』より転載

付図2 和久羅城跡略測図

て斜めに登ることで到達したものと考えられる。

登土塁に挟まれた通路をたどって虎口に至るといふ縄張と普請は、松江市朝酌町の和久羅城（標高261m）に典型的に認められる。（付図2 和久羅城略測図 参照）当城は、毛利元就自身が兼重元宣宛の書状⁽³⁾で荒隈城に続いて築城を命じたほど、雲芸攻防戦の最初から重視した山城である。大橋川北岸のほぼ中央に地取するところから、宍道湖・大橋川・中海の制海権を掌握する上で必須の位置にあり、尼子家復興戦の段階でも真山城を拠点とした尼子方との戦闘が和久羅城の裾の各所で戦われた。

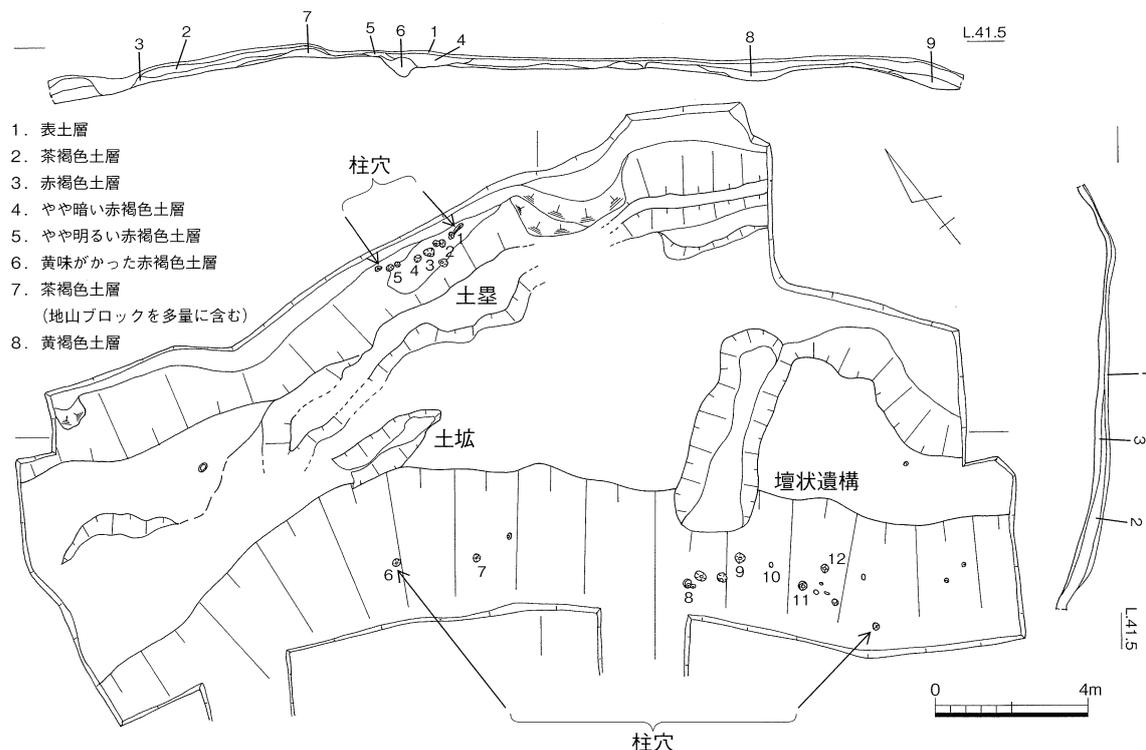
和久羅城の場合、鳥嘴状に狭まった登土塁の間を通過して登ると、土塁で囲まれた枡形虎口に至る。これが曲輪群の北西端で、南東端に位置する主郭（付図2の①）までの連絡通路は複数の曲輪から横矢を掛けることを意識した縄張とされ、②郭の西端には攻勢を防ぐための土塁を横たえるといった普請も施されている。重視されるだけあって、総じて完成度の高い山城である。

その点、池平山城にあっては、西2郭と西3郭の上面の削平も十分とはいえない。はじめに述べたように、普請の程度は主郭付近をのぞくと全体的に丁寧とは言えない。西2郭・西3郭と主郭・西1郭との間の曲輪間の連絡をはじめ、虎口空間の背後も十分な普請が施されていないために、城域全体としての堅固さを失ってしまっている。陣城の常として、主郭付近と虎口を造成した後に当城を取りまく軍事的緊張が弱まったため、普請が停止された可能性⁽⁴⁾が考えられよう。

3. 氏穴遺跡（北1郭）との関連について

主郭の北東約400mに位置したのが氏穴遺跡である。昭和57年に行われたこの調査は、池平山から伸びる丘陵が北方と南西方向に分岐する地点（標高43m）を中心に行われた。⁽⁵⁾

分岐点に設定されたA区では、小形の古墳1基が存在するとの想定の下で調査が進められたが、古



『氏穴遺跡発掘調査概報』より転載 一部加筆

付図3 氏穴遺跡B区調査終了時測量図

墳に関連する遺構も遺物も検出されていない。その東部にあたるB区からは、平坦面の北側に排土で造られた土塁、南東側には方形台状の「壇状遺構」、平坦面の南北両斜面からは多数の柱穴が確認されている。(付図3 B区調査終了時測量図(2)参照)このような遺構の出土状況と地勢から、調査概報では「この城(池平山城)の防衛上最も脆弱な部分を補うために設けられた」曲輪と判断し、北1郭と命名している。さらに、「主郭から大きく離れている上に、土塁・柵にしても、それほど強固なものでないことも考え合わせると、優勢な兵力で攻められた場合には、主郭方面へひきあげる捨郭的な性格」と考えている。

B区の調査成果の中で注目したいのは、柱穴の分布と機能についてである。土塁の北側では、3mたらずの間に10個がほぼ一列に並んで検出されている。南側斜面でも22個の柱穴が確認されているが、比較的集中している部分もあれば心々距離が2m程度の広がりを持つ部分もあって、間隔・配列ともに不規則である。ただ、南北ともほぼ40mの等高線に沿っており、また殆どの柱穴が斜面下方に傾けて掘られていることも確認されている。したがって、一貫した縄張観に立つ普請と見てよかろう。調査概報は、柱穴は北側の土塁や南側の斜面を守る逆茂木あるいは乱杭と見ているようであるが、集中している部分については妥当な評価と思われる。

荒隈城一之郭では、土塁で囲まれていたと推定される曲輪面の東側斜面に柱穴が集中して検出されている。⁽⁶⁾さらに、この一段下の平坦面には心々距離80cmの柱穴が並んでいた。前者の上端径が14cm前後であるのに対し、後者は20cm程度で深さも深い。前者は土塁の外側の斜面に植えられた逆茂木あるいは乱杭であり、氏穴遺跡B区でいうと土塁の北側斜面や南西側の逆茂木あるいは乱杭に相当するものであろう。荒隈城一之郭では、さらにその外側に柵列を回らせて遮断ラインを二重に敷いていたと見られる。

これに対して、池平山城B区の柵列は、前述のように心々距離が広く上端径と深さも大きい。控え柱は確認できないが、総じてしっかりした造りの柵列と考えられよう。

なお、氏穴遺跡B区から南東に伸びる丘陵上は、現状では西側斜面の縁辺だけが残されているものの、深田運動公園のテニスコートやゲートボール場、遊園地や駐車場とされていて、旧状をうかがい知ることができない。しかし、地図上では緩やかに下降する舌状丘陵が続くので、B区に続く広義の城域の一部と考えて良かろう。

A区から南西の主郭方面に続く丘陵は、途中で大きく落ち込み、その鞍部を廻田から氏穴池に向かう山道が通っている。この自然地形によって氏穴遺跡(池平山城北1郭)と池平山城の主要部は切断されている。そして、その南西に主郭から伸びた丘陵が再び連続する。

丘陵途中には古墳と思われる高まりがあり、稜線の東側だけが削り落とされた部分も残るが、全体的にはきちんと削平されて形成された曲輪群とは見えない。調査概報では東1郭と命名されている主郭東方の丘陵上も、片側だけが削り落とされた部分もあるが縄張に一貫性がなく、普請も同様に不十分である。

ただ、前述のように、主郭北方の丘陵の付け根にはL字形の土塁状の普請の跡(C)が認められる。これを、不十分ながら土塁囲みの虎口で造成途中で普請が中断されたとみると、氏穴遺跡(北1郭)を含めた北方の丘陵は、主郭とその周辺に普請が集中された結果殆ど手が加えられなかったものと考えられよう。

4. 周辺の山城遺構との関連について

前述のように、佐陀川低地は宍道湖岸の内湖である佐陀江から日本海岸の鹿島町恵曇・古浦の港を結ぶ起伏の少ない通路である。佐陀江の南岸を、西方から突きだして縁取る岬の突端には満願寺城(標高28m)が築かれていた。城将の湯原春綱は、初め尼子氏に属したが雲芸攻防戦が始まると早々に毛利元就に服属し、水軍の将として活躍する。満願寺城そのものが宍道湖岸の水軍城としての機能を發揮するのである。

佐陀江から恵曇・古浦方面に向かうと、佐陀川低地が狭まって、北進を阻むかのように立ちはだかる東西の尾根筋に直面することになる。西側は麓に佐太神社が鎮座する稜線で、東側の尾根筋の先端に位置するのが海老山城(標高90m)である。海老山城が佐陀川低地の南側の関門であり、池平山城は北側の関門と言えよう。

狭まった佐陀川低地には、海老山城の北東約1kmに芦山(呂山)城(標高50m)、さらにその北東約1kmに大勝間山城が地取している。池平山城はその西方約2.2kmの地点にある。(付図4 湖北の主要城館 参照)

大勝間山城跡

この城域内は鹿島中学校や給食センター敷地等に造成されて削り込まれており、現状では西側の裾に階段状に曲輪らしい痕跡が認められるだけである。ただ、植林のためのひな壇の造成も行われており、耕作の可能性も含めて曲輪との速断は危険であろう。

残された城域の南端に対しては、松江鹿島美保関線の改築(改良)工事に伴って530㎡程度の狭い範囲ながら発掘調査が行われている。その成果⁽⁷⁾によると、調査区からは古代、中世、近世の遺構や遺物が検出されており、いわゆる三代の複合遺跡である。最高所のA区(標高19~21m程度)は南面に約3mの切岸を伴う曲輪であって、中国製の磁器類、土師質土器が出土し、たき火跡も確認されている。最も低い位置にあたるD区は、ほぼ全面が佐陀川の開削にあたっての揚土置き場とされていた。

注目すべきは、このD区の揚土層の下から弾丸が出土したことである。直径1.2cm、重量8.13gで、並筒に分類⁽⁸⁾される火縄銃の弾丸である。

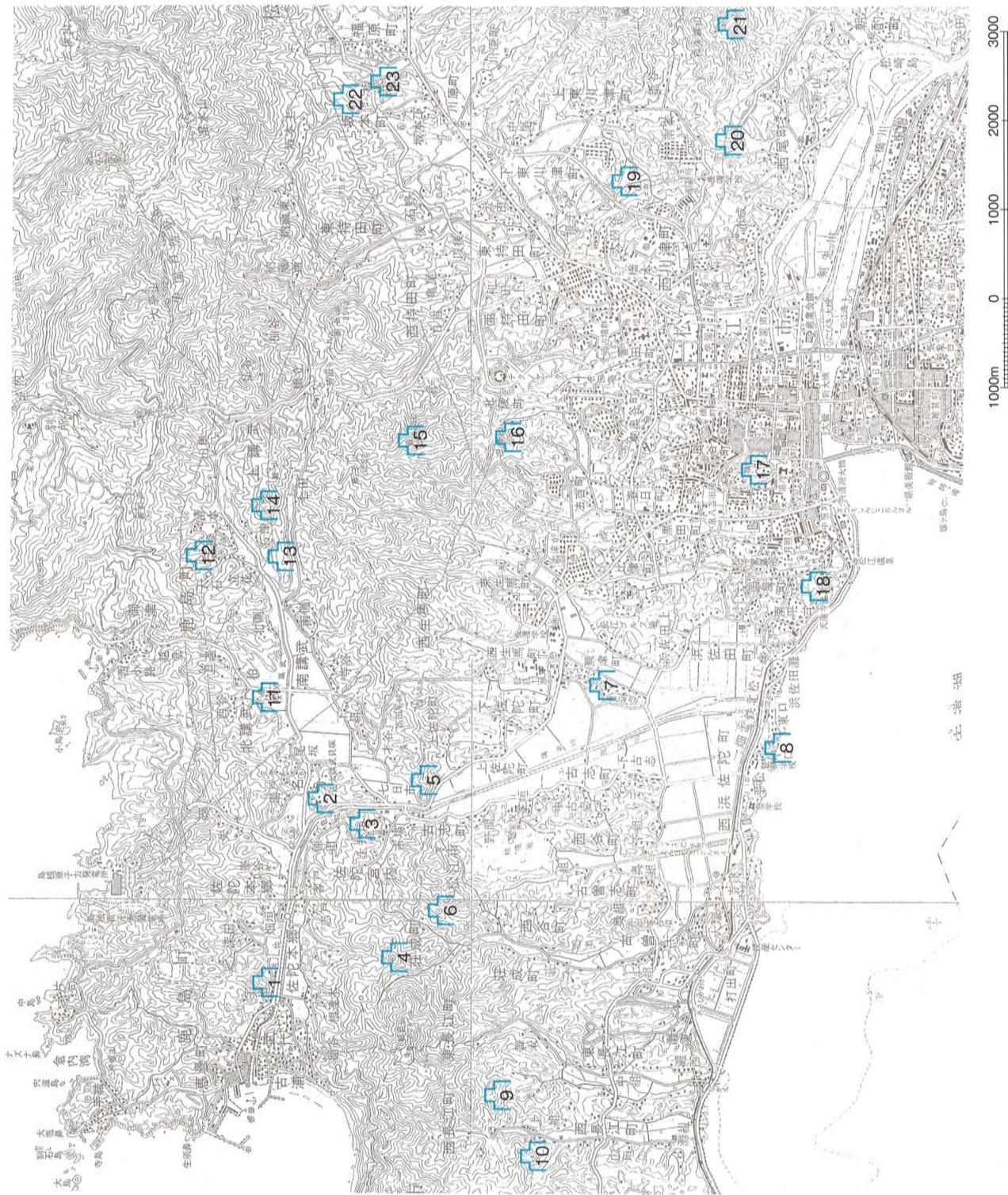
『雲陽軍実記』は、尼子家復興戦において、当城に立て籠もっていた毛利方に対して尼子勢が攻め寄せ、救援に派遣された毛利方との間で激戦になったという記事を載せる。また、雲芸攻防戦に破れて元就の軍門に下った尼子義久に従い、富田城から下城した約百十人の中の三刀屋蔵人には、「雲州勝間にて討死」という注記⁽⁹⁾がある。

ともに信頼度に疑問の残る史料ではあるが、尼子家復興戦の時点で大勝間山城をめぐる争奪戦があったことは事実と考えるが良からう。問題は、なぜ当城が争奪の的となったかである。つまり、さして高度があるわけでもなく、従って精妙な縄張と堅固な普請を施そうにもその可能性の少ない山城であるにもかかわらずである。

結論的に言って、それは大勝間山城が地取した位置にあると考える。つまり、これまで述べた佐陀川低地をたどる通路はこの地点で西向きに転じ、講武(多久)川の谷筋を下る通路と合流する地点に地取しているからであろう。

講武(多久)川の形成した講武平野は鹿島町で最大の広がりをもつ。したがって、この地域を支配する地方武士が、所領支配の拠点として城館を築いたのであろうことは容易に想定できることである。

1. 池平山城跡
2. 大勝間山城跡
3. 芦山 (呂山) 城跡
4. 伊貝山城跡 (?)
5. 海老山城跡
6. 牛切山城跡
7. 高柳城跡
8. 満願寺城跡
9. 二つ山城跡
10. 西長江要害山城跡
11. 小田山城跡
12. 大石山城跡
13. 松尾山城跡
14. 上講武殿山城跡
15. 真山城跡
16. 白鹿城跡
17. 末次城跡 (松江城)
18. 荒隈城跡
19. 川津城跡
20. 稲葉城跡
21. 和久羅城跡
22. 安土山城跡
23. 坂本館跡



付図4 湖北の主要城館

現在確認されている講武平野に面した四城のうち、大石山城（標高112m）の南麓には「古殿」「立花」といった地名が認められる。城館に関係するこのような地名が残されていることからすると、当地域を領した地方武士の支配拠点がこの山麓に存在し、大石山城はその詰城だったと思われる。また、佐陀川低地に面する芦山（呂山）城の南麓にも「土井垣」という城館関連地名が残り、当城の起源を想起させられるところである。

前述の海老山城の築かれた尾根は、鳥ノ子山（標高243.3m）から下ってきた稜線の先端であり、旧松江市と八東郡鹿島町の境界をなしていた。鳥ノ子山を頂点として東側の尾根をたどると真山城に至り、西側の尾根筋を下ると白鹿城に至る。したがって、真山城と白鹿城は鳥ノ子山を介して連続しているのである。とりわけ、中流の赤田で講武（多久）川に合流する南側の七田川の支谷は、鳥ノ子山の北麓にあたる。したがって、現在確認されている講武平野に面した諸城と佐陀川低地に面する諸城には、雲芸攻防戦や尼子家復興戦の期間に築城あるいは改修された可能性が考えられる。前述の大石山城にしても、また芦山（呂山）城についても、この期間に陣城として改修され機能の変化をきたしたのではあるまいか。

なお、大石山城の講武（多久）川を挟んで南方約1kmには松尾山城（標高88.3m）、南西約1.8kmには小田山城（標高23.2m）がある。そして小田山城の南西約1.3kmに位置するのが大勝間山城である。

上講武殿山城跡

当城の位置については、その山名から上講武の殿山（標高195m）と考えられてきたため、前述の城館調査においては「明瞭な遺構なし」と報告されている。しかし、平成16年に実施された発掘調査によって、殿山の山頂部は山城跡ではないことが確認された。⁽¹⁰⁾ 代わって、西方約900mの稜線上（標高166.3m）に新たな山城跡が発見されたが、これが上講武殿山城に比定される場所である。

上講武殿山城は、主郭の周囲を数段の曲輪で取り囲んでいるだけで縄張の面ではとりたてて特徴のある山城とは言えない。ただ、東西の尾根筋に対して掘切で明確に城域を区画しているが、とりわけ東側の稜線（これをたどると殿山に至る）に対しては、主郭足下の曲輪に接する掘切には土塁を伴わせ、さらに鞍部にも掘切を配して切断効果を強化している。

上講武殿山城で注目されるのはその地取、つまり講武平野全域はもとより出雲平野から日本海にまで及ぶその眺望の良さである。当城の稜線の西方約800mに地取る松尾山城とともに、鳥ノ子山の北麓つまり真山城と白鹿城への講武（多久）川の谷筋、とりわけ七田川の支谷からの攻勢に備えたのであろう。

むすびにかえて

鹿島町内の中世城館に関して、きわめて少数ながら、発掘調査と縄張調査のもつ長所を融合させて検討を加えてみた。もちろん、現在確認されている城館以外になおいくつかの城館遺構が眠っている可能性があり、その所在確認調査がさらに進められなければならない。そのために、まずは縄張調査が有効であろう。

はじめに述べたように、池平山城については、発掘調査以前から縄張の概要を把握したうえで担当者と協議して調査範囲を確定し、調査中にも現地でも細かく助言することができた。今後とも、たとえその一部と雖も城館遺構が発掘調査の対象とされる場合には、このような形での総合的な調査が望まれるところである。

1. 鳥根県教育委員会『鳥根県中近世城館調査報告書〈第2集〉出雲・隠岐の城館跡』平成10（1998）年3月刊による。
なお、これ以前に、石井悠氏によって鹿島町内の山城遺構に対する現地踏査と文献調査が行われている。（同氏「鹿島町内の中世城郭」八東郡鹿島町立鹿島中学校『研究集録』1992年3月刊）
2. 後述する氏穴遺跡については、鹿島町教育委員会『鳥根原子力発電所2号機資材運搬道路新設に伴う氏穴遺跡発掘調査概報』1983年3月刊、上講武殿山城跡については、中国電力株式会社・鳥根県教育委員会『鳥根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』2008年3月刊、大勝間山城跡については、松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団『松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う大勝間山城跡発掘調査報告書』2009年3月刊参照。
3. 『萩藩閩閩録』52兼重五郎兵衛
4. 鷹ヶ巢城の北端（拙稿「毛利氏の出雲における山城について」『山陰史談』22所収）や穴道町城山城（同「普請未成の山城について」注1の『出雲・隠岐の城館跡』所収）などがこれにあたる。
5. 以下、氏穴遺跡の調査成果は注2のうちの『同遺跡発掘調査概報』による。詳細は同調査概報によりたい。
6. 以下、荒隈城の調査成果は松江市教育委員会『荒隈城跡』1982年刊による。詳細は同報告書によりたい。
7. 以下、大勝間山城跡の調査成果は注2のうちの『同発掘調査報告書』による。詳細は同報告書によりたい。
8. 須川薫雄『日本の火縄銃Ⅰ』1989年刊
9. 尼子家旧記「永禄九年十一月廿九日雲州富田下城迄相届衆中次第不同」『鳥根県史第八編』所収
10. 以下、上講武殿山城の調査成果は注2のうちの『鳥根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』の上講武殿山城の項による。詳細は同報告書によりたい。

第6章 小 結

池平山城跡は、南西から北東に延びる丘陵に築かれた山城である。丘陵の北側から西側にかけては谷に降る急峻な斜面となっている。主郭は長さ約65m、幅約20mの細長い平坦面で、平坦面の端には櫓台と思われるところがみられる。主郭の南東から南西側にかけて堀切が確認され、堀切から見る主郭は険阻な地を感じられる。主郭の周りには今回確認された南西1郭も含めると8郭が設けられている。

北1郭の一部は現在、道路によって消失しているが、氏穴遺跡（B区）の発掘調査によって柵列や低平な土塁が検出されている。池平山城の丘陵と島根半島北側に連なる山塊との境にあり、北側の防御の拠点であったと考えられる。北1郭の東には緩やかな尾根が続き、その先端にもさらに郭が存在していたと想像される。また、北1郭の南西側尾根には古墳が存在すると推定されたが、古墳に関係する遺構や遺物は検出されなかった。不規則な柱穴が18個検出され、防御のために設けられたと考えられた。この場所も郭であった可能性が考えられるのではなかろうか。

主郭北東から南東側に派生する尾根には東1郭が、南東尾根から南東に派生する尾根には南1・2郭が位置している。これらの郭が位置する尾根はそれぞれ下方へと続き、北1郭と同様に他の郭の存在を窺わせる。南1・2郭と主郭の間は、堀切によって切断されている。

西1郭は主郭の西側に位置し、長さ40m、幅15mの細長い郭で、北側は堀切によって切断されている。標高54mを測り、木々がなければ西2・3郭、南西1郭を見通すことができる。

西1郭から南に派生する尾根で検出したのが、南西1郭である。今回の調査（B区）で、尾根を人為的に加工した痕跡や柵列が検出され、郭と考えられた。柵を作り、敵が一気に西1郭や主郭まで攻め込まないようにするための防御の場所であったと推測される。

西側丘陵の突端に位置するのが西2・3郭である。今回この一画を調査（A区）し、郭4箇所、通路状遺構2条、土坑2箇所を検出した。西2・3郭の南西側は、現在、崩落や家などの造成によって削られているが、池平山城の西側虎口にあたりと考えられ、通路状遺構1・2も下まで続いていたと推測された。西2郭はA区の最高所にあり、広い平坦面を有し、西2・3郭の防御の拠点であったと思われる。西3-1、2郭は盛土をして郭を造っている。それだけの時間と労力をかけてこの場所に郭を造るということは、やはりこの場所が重要な場所であったことを示唆しているようにも思われた。

A区で検出したSK01・02の遺構の性格はわからなかった。遺物がなかった為、出土した炭化物の年代測定をおこなったが、遺跡に関係するような年代は得られなかった。西3-1郭の盛土の年代に関しても同じ様な結果が得られ、この丘陵が長期にわたり安定した状態であり、おそらく中世の頃に今のような形となった可能性も推測された。

池平山城は、「朝山家附家系図」『八東郡誌』によれば、応永6（1399）年、佐太神社の神主であった第十八代朝山昌時（安芸守）によって築造されたと伝えられている。その後、第十九代昌景、第二十代貞昌、第二十一代利綱と居城し、利綱は佐陀宮内に芦山城も築き、その子第二十二代綱忠は芦山城に居城している。第二十三代貞綱が毛利との戦いに敗れて戦死するまでの間、朝山氏は尼子に属していた。天文11（1542）年、大内義隆の武将冷泉隆豊が大根島から手結浦で尼子軍と戦った時には、文献には記されていないが、この池平山城においても日本海を監視し、防御の拠点としていたのではなかろうか。その後、第二十四代慶綱からは毛利氏に属していた。『陰徳太平記』には水運に関する

事も書かれ、その当時、海上交通による兵糧の調達がどれほど大事であったかが窺われる。池平山城も日本海を監視し、糧道を遮断するには絶好の地にあり、朝山氏が尼子側でも毛利側でもその役割は同じであったと考えられる。

池平山城跡に関する文献資料は少なく、城の役割などを文献から知ることは難しい。しかし、今回の調査結果や縄張図、立地からすると、室町時代から戦国時代にかけて、その役割は重要であったと推察される。今回の調査によって少しでも池平山城の様相を知りえたことは有益であり、また、数少ない城館調査の一資料となりえたであろう。

- 参考文献** 『雲陽誌』黒澤長尚 享保2年 1717年
『陰徳太平記』香川正矩 1980年
『朝山家附家系図』『八東郡誌 本編』1973年
『氏穴遺跡発掘調査概報』鹿島町教育委員会 1983年
『朝山文書』『大内氏實録』『鹿島史料』鹿島町 1976年
『尼子・大内・毛利六十年戦史』吉村雅雄 1995年

図 版



作業風景

池平山城跡遠景
(南東から)



A区調査前近景
(北東から)



A区調査前近景
(北東から)





A区北東側完掘後（北東から）



A区南西側完掘後（南西から）



西2郭・西3-1、2郭
完掘後（南西から）



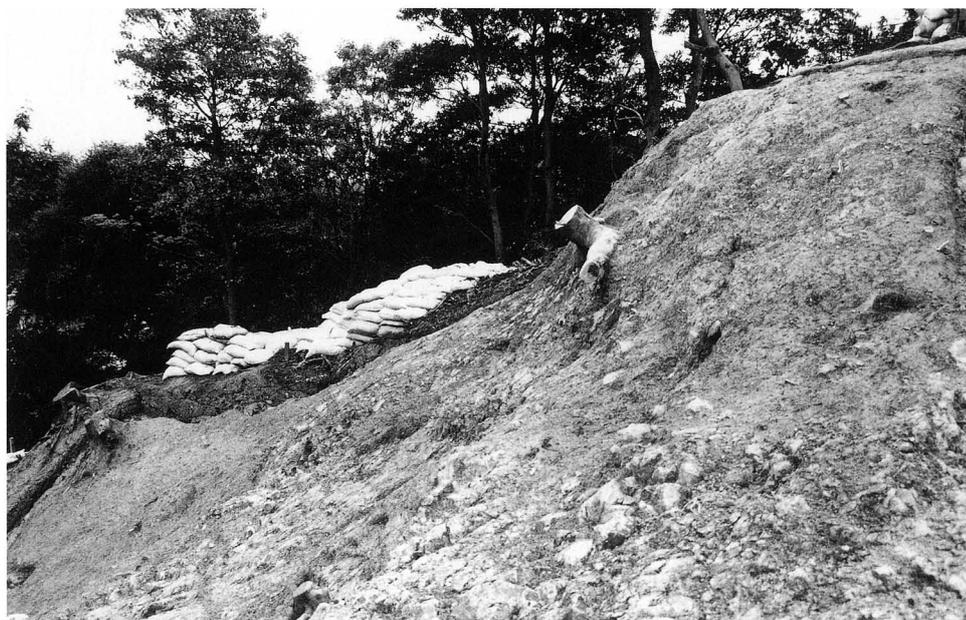
西3-1、2、3郭完掘後
（南東から）



西3-1郭完掘後
（南東から）



西3-1郭
南西端土層断面
(南東から)



西3-2郭完掘後
(南東から)



西3-3郭完掘後
(南東から)



通路状遺構 1 完掘後
(東から)

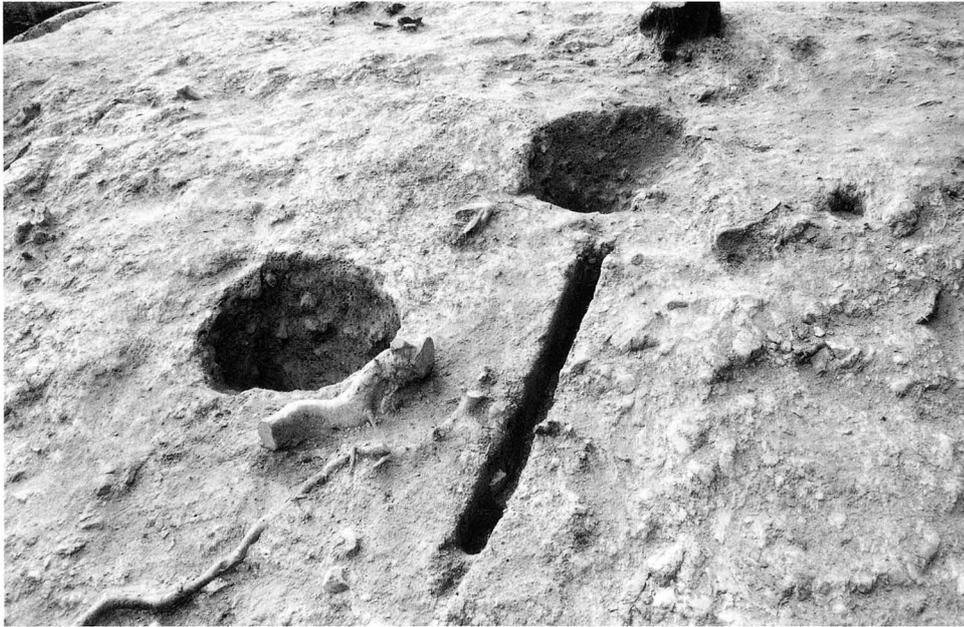


通路状遺構 1 完掘後
(南西から)



通路状遺構 2 完掘後
(南西から)

図版6



SK-01・02完掘後
(南東から)



SK-01完掘後
(南東から)



SK-02完掘後
(南東から)



B区調査前近景
(北から)



B区南側拡張区
調査前近景 (西から)



B区南側拡張区
調査前近景 (東から)



B区北側完掘後（南東から）



B区南側～西側完掘後（西から）



柵列完掘後
P2～5（東から）



柵列完掘後
P5～7（北東から）



柵列完掘後
P8～10（北西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いけびらやまじょうあととはくつちようさほうこくしょ						
書名	池平山城跡発掘調査報告書						
副書名	松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第130集						
編著者名	廣濱貴子、渡辺正巳、山根正明						
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	〒690-8540 鳥根県松江市末次町86番地 TEL 0852 (55) 5284						
	〒690-0886 鳥根県鳥根町加賀1263-1番地 TEL 0852 (85) 9210						
発行年月日	西暦2009年（平成21年）10月30日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
いけびらやまじょうあと 池平山城跡	しまねけん 鳥根県 まつえし 松江市 かしまちよう 鹿島町 さだほんこう 佐陀本郷 2905-1 2905-3 2903-11 2903-13 2907-3 2903-2	32201	K44	32° 31' 14"	2009.5.15 ～ 2009.7.24	526㎡	松江鹿島美保関線 佐陀本郷工区改築 (改良) 工事
				130° 17' 34"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
池平山城跡	城址	室町時代～ 戦国時代	郭・道路状 遺構・土坑・ 柵列	なし		郭5箇所・柵列1条 通路状遺構	

松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築（改良）工事に伴う

池平山城跡発掘調査報告書

2009年10月

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 (有)高浜印刷
島根県松江市東長江町902-57